WAM補助金　ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト

第４次派遣報告書発行に寄せて

福祉系大学経営者協議会
会 長　島　田　燁　子

福祉系大学経営者協議会は、福祉系大学の経営に携わる責任者（理事長・学長）が一堂に会して、社会福祉専門職の社会的地位の向上、社会福祉についての社会的認知の向上、日本の社会を支える社会福祉人材養成教育の発展等を推進することを目的として 2009 年 6 月 29 日に設立されました。現在、全国の 20 校の大学が加盟しています。

東日本大震災の被災地の復興に向けて私たち協議会に「何ができるのか」、またソーシャルワーカーを養成する私たちにふさわしい「支援」の在り方について関西福祉科学大学の遠藤洋二准教授を委員長に指名して検討をいただきました。その結果、この「ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト」「学生の“語り部”プロジェクト」が考案されました。これは、私たち協議会に加盟する大学の学生と指導教員がチームを組み、東北の被災地で活躍するソーシャルワーカーにスポットを当てインタビューを行い、その活動内容や苦労談、成功談、失敗談、いま必要なこと、改善すべきことなどを聞き取り、またそこで知ることができた状況を持ち帰ってさらに多くの方々に伝えていくというものです。被災地で活動するソーシャルワーカーに対する後方支援です。被災地で活躍するソーシャルワーカーの活動内容をまとめ報告書・インタビュー集などをアーカイブとして残し、全国に発信することで次の支援活動につなげるとともに、ソーシャルワーカーの後進育成をも期していきます。

第 1 次のパイロットプラン、第２次派遣に続いて、第３次派遣は、関西福祉科学大学・淑徳大学・中部学院大学の３校が学生と指導教員がチームを組んで、岩手県、宮城県にて本格的な活動が行われました。

そして、今回の第４次派遣は、独立行政法人福祉医療機構（WAM）の助成金を受けて、関西福祉科学大学、淑徳大学、文京学院大学の３校が、「原発問題」という深刻な事情を抱える福島県にスポットを当てて教職員･学生のチームを派遣して活動を展開いたしました。福島県の社会福祉士会との連携により、入念な事前学習、被災地での講義、オリエンテーション、インタビュー、グループ討議、ミーティング、反省会、報告書の提出、取りまとめというように進行していきました。これらの様子は２月にシンポジウムという形で広く社会に伝えてまいります。この報告書を読む皆様にも、このプロジェクトで多くのことを学んだ学生たちの様子を知っていただき、現地で活躍するソーシャルワーカーの実際の声を聞いていただきたいと思います。

末筆ながら、インタビューに応じていただいたソーシャルワーカーの皆様、福島県の社会福祉会の皆様、ご講義をいただいた先生方、ご引率いただいた指導者の皆様、ご協力いただいた全ての関係者の皆様に紙面をお借りして心より厚く御礼を申し上げます。また、独立行政法人福祉医療機構（WAM）の助成金を得て幅広い活動ができましたことに感謝申し上げます。

も　く　じ

Ⅰ　事業の概要　・・・・・・・ 1

Ⅱ　「ソーシャルワーカーの“声” プロジェクト」　第 4 次派遣　・・・・・・・ 4

Ⅲ　報告集

【福島県】

◆座学　事前学習
2013 年 7 月 10 日、24 日　関西福祉科学大学　齊藤　由季・・・ 8

◆座学　事前学習
2013 年 7 月 4 日～8 月 17 日　淑徳大学　新保江吏万･森菜摘　・・・ 9

◆座学　事前学習
2013 年 8 月 10 日　文京学院大学　小野　綾子・・・・・12

◆座学　オリエンテーション
2013 年 8 月 20 日　関西福祉科学大学　福井　弥生・・・13

◆座学　オリエンテーション
2013 年 8 月 20 日　淑徳大学　岡田彩香･友利仁美　・・・15

◆座学　オリエンテーション
2013 年 8 月 20 日　文京学院大学　小野　綾子・・・・・17

◆講義　福島県社会福祉士会の取り組み
2013 年 8 月 20 日　関西福祉科学大学　植田　美悠　・・・18

◆講義　福島県社会福祉士会の取り組み
2013 年 8 月 20 日　淑徳大学　新保　江吏万　・・・・・・19

◆講義　福島県社会福祉士会の取り組み
2013 年 8 月 20 日　文京学院大学　小野　綾子　・・・・・21

◆視察　激甚被災地訪問
2013 年 8 月 21 日　関西福祉科学大学　中上　裕菜　・・・23

◆視察　激甚被災地訪問
2013 年 8 月 21 日　淑徳大学　友利　仁美･森　菜摘・・・25

◆視察　激甚被災地訪問
2013 年 8 月 21、22 日　文京学院大学　木村　恵理　・・・・・28

◆インタビュー　**渡邉明社会福祉士事務所**
2013 年 8 月 22 日　関西福祉科学大学　中上　裕菜 ・・・29
◆インタビュー　**福島県あだち地域相談センターあだたら**
2013 年 8 月 22 日　淑徳大学　新保　江吏万･森　菜摘・・32
◆インタビュー　**介護老人保健施設　楢葉ときわ苑**
2013 年 8 月 22 日　文京学院大学　木村　恵理 ・・・35

◆インタビュー　**K市T町仮役場　Aさん**
2013 年 8 月 23 日　関西福祉科学大学　福井　弥生 ・・・37
◆インタビュー　**いわき福音協会法人本部**
2013 年 8 月 23 日　淑徳大学　岡田　彩香･友利仁美・・・39
◆インタビュー　**福島県社会福祉士会**
2013 年 8 月 23 日　文京学院大学　小野　綾子 ・・・・・42

◆座学　グループ討議
2013 年 8 月 24 日　関西福祉科学大学　齊藤　由季 ・・・44
◆座学　グループ討議
2013 年 8 月 24 日　淑徳大学　岡田　彩香 ・・・・・・・46
◆座学　グループ討議
2013 年 8 月 24 日　文京学院大学　木　村　恵　理 ・・・48

Ⅴ　学生コメント
関西福祉科学大学 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50
淑徳大学 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
文京学院大学 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52

Ⅳ　報告集
プロジェクトを通じた学生の学び　関西福祉科学大学　斉　藤　千　鶴 ・53
福島県の現状と課題　淑徳大学　山　口　光　治 ・・・・55
災害時のソーシャルワーカーの役割　文京学院大学　鳥　羽　美　香 ・・・57
あとがき ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・59

Ⅰ　事業の概要

１．福祉系大学経営者協議会「東日本大震災復興支援プロジェクト」について

福祉系大学経営者協議会は、福祉系大学の経営に携わる責任者が一堂に会し、社会福祉専門職の社会的地位の向上、社会福祉についての社会的認知の向上、日本の社会を支える社会福祉人材育成教育の発展等を推進することを目的として、平成 21 年 6 月に設立され、全国の福祉教育を実施する 20 大学が加盟している。

福祉系大学経営者協議会においても、東日本大震災に対する取り組みを行うべく「復興支援委員会」を立ち上げ、「復興支援に関して何ができるか」を協議することとした。

２．コンセプト（基本的な考え方）

①将来の社会福祉を担う「人材育成」という福祉系大学のミッション

②福祉系大学が持つ「社会福祉に関する専門知識」

③「全国各地の大学」が参加する全国的発信力

等、福祉系大学経営者協議会の設立理念、団体の特徴を生かしたプロジェクトとする。

⇩

災害支援における社会福祉専門職（ソーシャルワーカー）に焦点をあてたプロジェクト

３．テーマ・目的

ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト

（災害支援におけるソーシャルワーカーの活動を記録する）

ソーシャルワーカーが災害時に「何ができるのか」、「何をすべきなのか」などを、実際に災害支援活動に従事ソーシャルワーカーから学生が聴き取り、記録として残す。

⇩

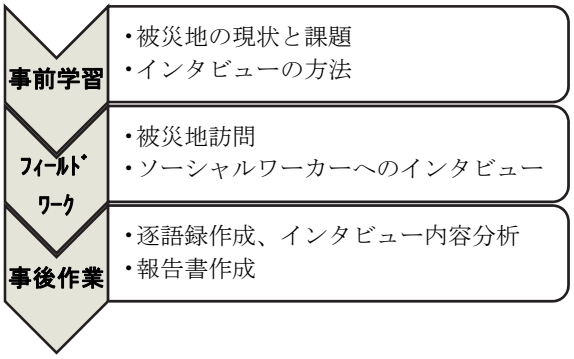
学生“語り部”プロジェクト

（ソーシャルワーカーの”声”を発信する）

ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト」で聴き取った内容を整理し、講演や出版物などを通じて発信する。

４．プログラム

（１）ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト



・学内で一定のトレーニングを受けた学生４名と教員１名がチームを編成し、１週間程度被災地に入り、被災地の現状を理解すると共に、現地で活動するソーシャルワーカーにインタビューを行うなど、フィールドワークを実施する。

・フィールドワークの成果をまとめ、その内容をチームで分析し、インタビュー内容とともに報告書にまとめる。

（２）「学生“語り部”プロジェクト」

「ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト」に参加したチームが、学内外において広報活動を行う。

また、直接支援の実施を検討している機関、団体等に、要援護者および支援者であるソーシャルワーカーのニーズに関する情報を提供することで、支援とニーズのミスマッチを緩和する。

５．ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト　参加大学

①　:第１次派遣（パイロット事業）	（宮城県　平成 24 年３月 12 日～17 日）
②　:第２次派遣	（岩手県　平成 24 年８月 21 日～25 日）
③　〃	（宮城県　平成 24 年９月３日～７日）
④　:第３次派遣	（宮城県　平成 25 年３月３日～７日）
⑤　:第４次派遣	（福島県　平成 25 年８月 20 日～24 日）

参加プロジェクト					大　学　名
１次	２次		３次	４次	
	②		④	⑤	淑徳大学
	②		④		中部学院大学
①	②		④	⑤	関西福祉科学大学
①		③		⑤	文京学院大学
	②				日本社会事業大学
		③			日本福祉大学

６．本プロジェクトを起点とした展開

本プロジェクトはソーシャルワーカーの声を記録し、発信することを目的としているが、参加した学生や教員が中心となり、以下のような展開が考えられる。

①要保護者への直接支援

ソーシャルワーカーの視点から被災者の生活（生活再建）課題を明らかにし、「学生”語り部”プロジェクト」により広く地域社会に伝えることで、学生、教員など大学関係者をはじめ、外部の機関、団体による直接支援に結びつける。

②ソーシャルワーカーへの後方支援

「ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト」での聴き取り内容を分析し、災害支援活動における問題点や課題を整理し、ソーシャルワーカーへの後方支援策を模索する。

③次代のソーシャルワーカーの育成

ソーシャルワーカーとして災害支援を行う際に必要な知識や技術について理解し、講座やワークショップを通じて、大規模災害・事故等で機能するソーシャルワーカーを育成する。

Ⅱ「ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト　in 福島」第４次派遣

１．目　的

大規模災害時、ソーシャルワーカーが「何ができるのか」、「何をすべきなのか」などを、災害支援活動に従事したシャルワーカーから学生が聴き取り、ソーシャルワーカーの“想い”も含めて記録として残すことを主な目的とする。

２．概　要

学生４名（程度）と教員１名がチームを編成し、１週間程度被災地に入り、その現状を理解すると共に、現地で活動するソーシャルワーカーにインタビューを行うなど、フィールドワークを実施する。

また、フィールドワーク実施後、その成果を報告書・インタビュー記事にまとめる。

３．期　間

事前学習　　：　平成 25 年８月下旬

フィールドワーク　：　平成 25 年８月 20 日（火）～8 月 24 日（土）

４．参加校（参加チーム）

淑徳大学、関西福祉科学大学、文京学院大学

５．プログラム

（１）事前学習（各校が独自に実施）

（２）フィールドワーク

①拠点(宿泊場所)

ホテルバーデン

〒963-0112

福島県郡山市安積町成田字島ノ前 2-3

TEL / 024-947-7777　FAX / 024-947-7007

HP：http://www.hotel-baden.com/

②スケジュール【福島県】

日　　程		内　　容	実施単位
8 月 20 日 （火）	午後	現地集合（宿舎）	各チーム
		オリエンテーション：関西福祉科学大学　遠藤　洋二	合同
	夜間	夕食、休憩等	合同
		講義：福島県社会福祉士会会長　島野　光正　氏 「福島県社会福祉士会の取り組み」	各チーム
		交流会	合同
	宿泊	ホテルバーデン	
8 月 21 日 （水）	朝	朝食等	各チーム
	午前・午後	激甚被災地訪問	合同
	夕方～夜間	宿舎　帰着	
	夜間	夕食、休憩等	各チーム
		ミーティング ・グループ討議 ・インタビュー方法の確認	合同
	宿泊	ホテルバーデン	
8 月 22 日 （木）	朝	朝食等	各チーム
	午前・午後	被害状況視察・インタビュー	
	夕方～夜間	宿舎　帰着	
	夜間	夕食、休憩等	
		ミーティング 反省会	合同
	宿泊	ホテルバーデン	
8 月 23 日 （金）	朝	朝食等	各チーム
	午前・午後	被害状況視察・インタビュー	
	夕方～夜間	宿舎　帰着	
		夕食、休憩等	
	夜間	ミーティング 反省会	合同
	宿泊	ホテルバーデン	
8 月 24 日 （土）	午前	朝食等	各チーム
	午前	合同ミーティング ・グループ討議 ・フィールドワーク総括 ・事後作業の確認	合同
	正午	解散	

Ⅲ　報告集

作成者	関西福祉科学大学　齊藤由季
分類	座学
プログラム名	事前学習
日時・場所	7 月 10、24 日　関西福祉科学大学

まず 7 月 10 日は、関西福祉科学大学 1 回生による活動報告を聞いた。そこでは、高校時代にボランティアとして岩手県大槌町に行った時の写真を紹介しながら、その時の様子が説明された。写真は町の風景が映されていたが、海岸部は地震に加え津波の被害による被害が非常に大きい。そして家屋や生活用品、子ども達が使用しているぬいぐるみ等が瓦礫として山積みにされていたり、墓地では墓石が倒れているところもあった。震災に遭ってから子ども達の笑顔が消えていたが、ボランティアの人と遊んでいる時、子ども達の笑顔が蘇ったという話を聞いて、災害の恐ろしさ、被害の大きさを感じた。

現地の方々は笑顔で前向きに災害当時の話をしていたということだった。特に関心を持った話は、復興のために使われる支援金である。支援金は本来町の再建のために使われる。しかし瓦礫の撤去というようにそこで働いている人達にお金を払っていたため支援金が本来の用途として使われていないという事実があった。1 回生の報告の後、私達は福島県内の地理を学んだ。震災で大きな被害を受けたいわき市や原発がある大熊町、その住民の避難先になった会津若松市等の地理の位置関係を学んだ。

24 日は、インタビューの仕方を学んだ。インタビューをする時には、まず何をするかについて各自の考えを発表し、その内容に順番をつけた。その後、IC レコーダーを机の上に出すタイミングやインタビュー中のメモは最小限に留めること、話を聞く時はアイコンタクトをとり、相槌をうつというようなインタビューの心構えを学んだ。そしてインタビューガイドを元にインタビューを始めた。インタビューの相手は 4 回生が担い、「語り部」で説明している内容を語ってもらった。いきなりインタビューガイド通りに災害当時の話を聞くと唐突すぎるため、冒頭では普段の業務や職歴、持っている資格の話をするようにとアドバイスを頂いたり、インタビューは質問に行き詰まらないように、司会者だけでなく全員で質問をし合うことが大切であるというアドバイスを頂いた。

私達は初めてのインタビューということもあり、つまづきながらのインタビューであったが、この失敗やアドバイスを生かして、神戸での事前インタビューやフィールドワークで致命的な失敗のないようにインタビューを行いたいと感じた。

作成者（大学名・氏名）	淑徳大学　新保江吏万　森菜摘
分類	座学
プログラム名	事前学習
日時・場所	７月４日～８月１７日　淑徳大学　埼玉キャンパス
講師・インタビュー対象者	山口光治先生

今回のプロジェクトの事前学習で主に行ったことをまとめた。

第 1 回　7 月 4 日(木)PM14:40～PM16:10

関西福祉科学大学第 1 次派遣の報告 DVD を視聴し、プロジェクトのイメージを具体化した。

第 2 回　7 月 18 日(木) PM14:40～PM16:10

事前学習日程の調整し、全体スケジュール(事前学習、フィールドワーク、報告書及び逐語録の作成、事後学習)の説明を聞いた。そして、引率者の紹介を受け現地調査チームの編成を行った。

第 3 回　7 月 20 日(土)PM13:00～PM16:00

東日本大震災と被害状況について把握するために、白地図を使い被災地の地理的な位置の明確化、DVD を視聴し被害状況を確認した。

第 4 回　7 月 21 日(日)PM12:00～PM13:00

第 3 次派遣団の報告会を聞いてまとめる（見学者：友利仁美)。

第 5 回　7 月 25 日(木) PM14:40～PM16:10

21 日の報告会のまとめを見学者が報告する。

第 6 回　8 月 2 日 AM9:00～PM15:00

9:00～12:00 までは、被災地に行く確認をしてからインタビュー実践を行った。初めにインタビュー要項を見ながら手順を全員で確認し、そのあと各ペアに分かれてインタビュー項目の打ち合わせを 45 分ほど行った。主に先生を相手に挨拶の仕方や座り方の配置などの確認し、インタビュー練習を始めた。12:00 から 1 時間ほどお昼をはさんで、午後 1:00 頃から事務局職員とキャンパス・ソーシャルワーカーの方を相手に、抜き打ちのインタビュー実践トレーニングを行った。このインタビュー実践でいろいろな反省点が出てきたので、そのあと改善策を考える時間を取った。最後にまとめでインタビューを行なって良かった点と反省点をそれぞれ書き、反省点を発表し先生からアドバイスをもらって終了した。

第 7 回　8 月 6 日 AM10:00～PM17:00

午前中はインタビューの方法の再確認とイレギュラーが起きたときの対応策を 4 人で話し合い、わからないことを先生に聞いた。そして、お昼を含み各ペアで 1 時間 30 分ほどインタビュー訪問先の施設のことを調べ、発表をした。その後に震災時に求められるソーシャルワーカーの機能や

役割を考えるため、被災地の映像（宮城県のドキュメント）を 90 分ほど見て、それぞれ感じたことを発表した。

第 8 回(最終回)　8 月 17 日 AM10:00～PM12:00

最終日は持ち物、服装、宿泊、調査時と現地滞在中の注意事項なども含めて、出発までの最終確認を行った。

私たちは今年はじめてこのプロジェクトに参加した。東日本大震災があった日から約 2 年、私たちはどのようなことができ、この震災によって何を知り、得ることができるのだろうか。そのようなことを思いながら臨んだ事前学習だった。

最初、私たちはこのようなプロジェクトがあると知ったとき、実際になにをするのかなどよくわかっていなかった。しかし、事前学習を通してこのプロジェクトがどのよう意味を持ち、どのようなことをしていくのかなどを知ることができた。

1 回目の事前学習では、このプロジェクトがどのようなものかを知るために第 1 次派遣後、関西福祉科学大学の学生が作った DVD をみた。そこには、私たちがニュースや新聞などで知っている以上の被害や人々の悲しみなどが映し出されていた。家や車などが流され、本当に人がここに住んでいたのか考えてしまい、しばらく私たちは何も言えなかった。そのあと、山口先生が被災地に行ったときに撮った写真をみた。それはテレビで映し出されていたところ、多くの家が津波によって流されたあとなどの写真だった。

事前学習の途中、千葉キャンパスの方で私たちの前に行った第 3 派遣の学生が高校生向けに語り部をやるということがあり、私たちのチームの中から代表で 1 人出席した。そこではその学生がどう思ったか、また現地のソーシャルワーカーはどのようなことをしたかなどを語ってくれた。また、語り部が終わった後、その学生に話を聞きに行くことができ、このプロジェクトで大切なことなどを教えてもらうことができた。

次の事前学習では、インタビューの基礎や流れなどを教えてもらい、実際に大学職員にインタビューをした。現地のソーシャルワーカーの方にインタビューしたい内容などを 2 人 1 組で決め、実際に山口先生にみてもらいながら最初の流れなどを行い、2 人でどのような役割分担をするかなどを考えた。そのあと、実際にインタビューという形でキャンパス・ソーシャルワーカーの方に 30 分ぐらいのインタビューをした。インタビューは難しいもので、自分が聞きたいことを聞いていたはずなのに、私の場合、話を掘り下げすぎたせいか、だんだん話がずれていってしまうことが多くあった。もう一人の仲間のフォローのおかげもあり、話を戻すことができた。30 分という短い時間だったが、以前働いていた医療ソーシャルワーカー業務についての話やその病院での出来事など、様々なことを聞くことができた。

次の事前学習では自分たちがインタビューする人がどのようなところで働いているのかなどを調べた。私たちが今回インタビューする方たちは、どちらも障がい者施設で働いている方々で、1 日目に行く「あだたら育成園」は知的障がい者の方を中心に支援していること、2 日目に行く「いわき福音協会」は知的障がい者と身体障がい者の方などを支援しているところで、支援部門によって多くの取り組みを行っていることを知ることができた。

このような事前学習を通して、私たちはこのプロジェクトの目的などを知り、現地に行って何

を知り、何を伝えていくのかなどを把握することができた。また、私たちが見た映像は 1～2 年前、震災直前のものが多く、私たちが行く時とはだいぶ状況が変わっている。2 年経って被災地の人たちはどう震災と向きあっているのかなど、私たちは伝えていかなければいけないのではないかと思う。

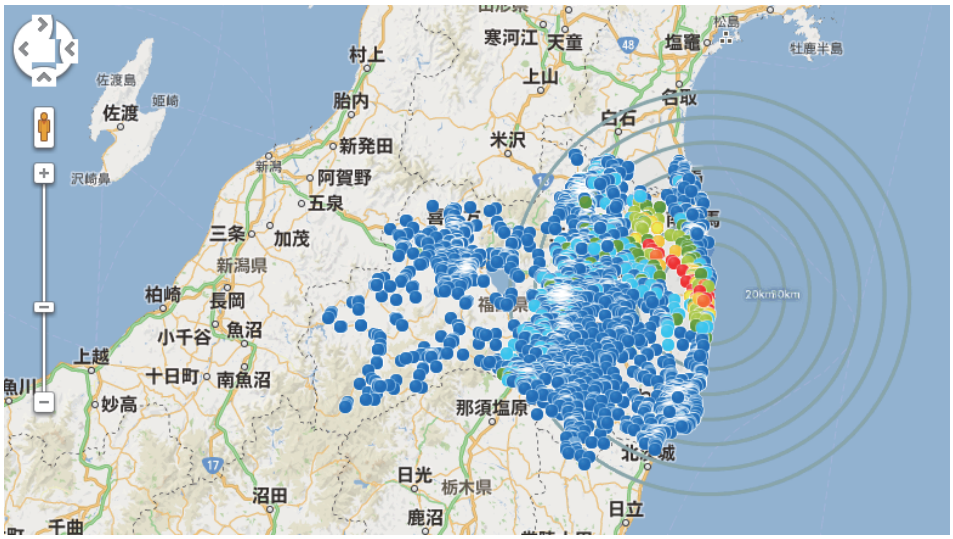
作成者（大学名・氏名）	文京学院大学　小野綾子
分類	座学
プログラム名	事前学習
日時・場所	平成２５年８月１０日（土）・文京学院大学
講師・インタビュー対象者	文京学院大学　鳥羽美香先生

「ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト in 福島」への参加にあたり、私たちはプロジェクトの概要やインタビュー対象者、インタビューの方法、被災地の状況について、その一例として東松島市で働く保健師の映像を見るなどして事前学習を行った。それに加えて各自で福島県の状況や、インタビュー先のいわき市、郡山市について調べた。

文京学院大学から参加する学生は私のみ初めての参加だったため、プロジェクトやインタビューの雰囲気が掴めずとても緊張した。しかし、足を引っ張らないように、またインタビュー対象者からより多くの体験や言葉を語っていただけるよう、自分なりに、精一杯頑張ろう、と思った。

今思うと、私たちはこの時、福島県の被災状況について少しも理解できていなかったと感じる。「東日本大震災の被害」ということから連想するのは、主に津波と原発事故であった。しかし震災後、宮城県へは１・２回訪れたことがあったが、福島県へは訪れたことが無かった、ということもあり自然と宮城県の被災状況の方が印象に残り、2 人とも分かっているつもりでも、頭の中では震災の被害＝津波、となっていたのではないかと思う。

福島県へ向かう際、私たちはやはり放射線のことが気になった。それは「無知」であったからだ。原発のことも分からず、そして地元の方々の「思い」も分からなかったためである。原発の「怖さ」や具体的な影響についてもまた分からなかった。しかし福島県社会福祉士会の方々へのインタビューや現地の視察等を通して、多くのことに気づき、知り、学ぶことができたと思う。



福島県放射能測定マップ　http://fukushima-radioactivity.jp/

作成者	関西福祉科学大学　福井　弥生
分類	座学
プログラム名	オリエンテーション
日時・場所	平成　25 年　8 月 20 日（火）
講師	関西福祉科学大学　遠藤洋二氏

8 月 20 日から現地でのプロジェクトが本格的に始まり、関西福祉科学大学、淑徳大学、文京学院大学のチームが集まって座学中心の学習を行った。

午後の 3 時過ぎから関西福祉科学大学の遠藤洋二先生が本プロジェクトの目的と概要について話された。このプロジェクトは私たちが被災地に行ったときに何が出来るのか、ソーシャルワーカーが出来ること又はどういったことをやってきたのかをインタビューや被災地訪問を通じて確かめ、それを外部に向けて発信することが大切であり、これは教員が主体となってやるのではなく、学生が主体となって新たな発見をし、教員と取り組むことを目的としている。そして何よりも楽しむということが大切であると述べられた。

遠藤洋二先生自身も、阪神淡路大震災で被災され、現実とかけ離れた光景や人を助けようと瓦礫をどけようとするのに動かない状況の中で、「圧倒的な無力感」を感じたと話されていた。

また棺桶を作ったり水を運ぶ仕事の中で本当にこれでいいのか？ソーシャルワーカーの仕事がしっかりと出来ているのだろうか？基本的な役割を見つめなおしたとも話されていた。

今回の東日本大震災では、阪神淡路大震災とは違い津波の被害がとても大きく、復興までの時間がとても長い。また、福島では原発被害を受け、各地で抱えている課題が異なっている。また今、被災地全体で言えることは、被災直後から時間が経過した現在、津波による行方不明者の家族が今なお苦悩する"あいまいな喪失"を抱えた状況が広がっているということだろう。それに伴い、ソーシャルワーカーが家族とはまた違ったケアや支援をしていかなければならない状況にある。

遠藤洋二先生の本プロジェクトの説明が終わった後、関西福祉科学大学 4 回生の植田さんから、前回の第 3 次派遣プロジェクトについてのプレゼンテーションが行われた。その中では、災害の時にソーシャルワーカーが取り組んだこと、そこから見える自分たちができることについて、4 つの枠組みに分けて話された。

1.初歩的なアセスメントと気づき　　2.介入時に道具を活用すること

3.アウトリーチによってニーズを見つけること　　4.支援・資源へとつないでいく

これらの事で、私たちソーシャルワーカーの卵が出来ることは、被災地で何もできなかったと言うソーシャルワーカーさんにインタビューをすること、そして共に考え新たな発見をすることで

ある、と自分の中で整理がつくのではないかと私は感じた。

作成者（大学名・氏名）	淑徳大学　岡田彩香　友利仁美
分類	座学
プログラム名	オリエンテーション
日時・場所	8 月 20 日(火)　14：00～17：00　ホテルバーデン
講師・インタビュー対象者	関西福祉科学大学　遠藤洋二先生　植田美悠さん

関西福祉科学大学の遠藤先生による、声プロジェクトの目的、災害時におけるソーシャルワーカーの話を聞いた。また、関西福祉科学大学４年生の植田美悠さんによる第３次派遣声プロジェクトの発表があった。その三つをまとめた。

1. このプロジェクトの概要・目的

私たちが災害時に出来ること、ソーシャルワーカーが災害時に出来ることを、インタビューや被災地訪問などを通じて確かめ、それを外に向けて発信していく。これは、学生が主体であり学生と教員が共同して取り組むことを目的としている。そして、とにかく楽しむことが大切である。学生がインタビューをすることによって、心を開いて話してくれる。上手くやろうとは思わずに、生のソーシャルワーカーの声を聴くということを大切にすること。

2. プレゼンテーション

関西福祉科学大学４年生　植田美悠さんによる、前回の声プロジェクトの発表。

災害の時にソーシャルワーカーが取り組んだこと。そこから見える自分たちに出来ることを考えていく。

１．初歩的なアセスメントと気付き

２．介入時に道具を活用すること

３．アウトリーチによってニーズを見付けること

４．支援、資源と繋いでいく

この４つのキーワードが重要である。このプレゼンは震災直後のものだが時間と共に変化していく。被災地の様子を目の当たりにして、何も出来ないという無力感を感じた。だが、そこで立ち止まってしまっては、本当に何も出来ないままで終わってしまう。その後のグループ討議では、普段から繋がりを持ち、そして関係を築いていき災害が起きた時は、インフォーマルな資源で対応することが大切であるという意見が出された。

3. 災害とソーシャルワーカー

１）遠藤先生のお話

阪神淡路大震災が発生した当時、大阪の児童福祉司の仕事をしていた。車での移動は不可能だったので、バイクで移動していた。道中、いたるところで火災が起きていた。その後、対策本部へ移動し支援をしていた。

２）東日本大震災と阪神淡路大震災

二つの震災の違いは「津波」があったこと。これは、死者の数にも影響を及ぼした。津波は何もかも奪っていき、遺骨を拾うことすら叶わなかった。

３）東日本大震災

死亡宣告はされているが、遺体が見つからないので「まだどこかで生きているかもしれない」という気持ちを持っている。「曖昧な喪失」という。行方不明者を待つ家族のケアが必要である。また、仮設住宅が高齢者にとって終の棲家となっている。将来の希望を見出せない人に対して、「ソーシャルワーカーはなぜ必要なのか」を考える。

このプロジェクトは、直接支援ではなく間接支援である。ソーシャルワーカーも被災者であり「あの時こうすれば良かった」という後悔の気持ちを抱えている。そのことについても考えてみる。また、被災地のソーシャルワーカーの話を聞いてニーズを考えていって欲しい。

作成者（大学名・氏名）	文京学院大学　小野綾子
分類	座学
プログラム名	オリエンテーション
日時・場所	平成２５年８月２０日（火）・ホテルバーデン
講師・インタビュー対象者	関西福祉科学大学　遠藤洋二先生、植田美悠氏

まず、このプロジェクトは「福祉系大学経営者協議会」におけるものであると、私たちは確認した。そして①将来の社会福祉を担う「人材育成」という福祉系大学のミッション ②福祉系大学が持つ「社会福祉に関する専門知識」 ③「全国各地の大学」が参加する全国的発信力等をコンセプトとし、その上で「災害支援における社会福祉専門職（ソーシャルワーカー）に焦点をあてたプロジェクト」ということを基本的な考え方として全員の共通認識とした。

このプロジェクトの目的は災害時にソーシャルワーカーがどのようにして災害支援を行っていたか、その経験を聴き取り、分析し、記録として残すこと、その後に学生自らが「語り部」となり他の学生等に発信する役割を持っている。

目的を再確認し、私は少し不安になった。被災された方の言葉を“学生の代表”のような立場となって聴き取り、そして発信する。この「発信」する力が自分にあるか、正しく、そして次の聞き手の心に少しでも響くように伝えられるか、と思うと自信がなく、不安になった。しかし先生方のお話で、学生が相手だからこそ語れることがある、それも社会福祉士を目指す学生だからこそそして震災発生から時間が経った今だからこそ被災された方も少しずつ自分の気持ち等を整理ができ、また相手に伝えるだけでなく自分自身でも「こんなことができた」のだと自他共に認めることができるのではないか。そして当事者の方も私たちも、今後に活かしていけるようにできないか、など自分だからこそ今回のプロジェクトに携わりできることがあるのだ、と少し不安も和らぎ、自信を持つことができた。また、植田さんの発表はスライドも効果的で、とてもうまくまとめられていると思ったが、今まで何度も苦戦しやっとここまできたという言葉もあったため、私はこの言葉から頑張ろう、という気持ちになった。加えて遠藤先生より、学生が主体的に、楽しく活動を行うことが大切だと教えていただいた。楽しく、ということには「被災地の方も暗い顔を見たくない」という意味が含まれている。これらのことから、やはり自分が今できることをできる範囲で努めよう、と考えるようになった。

作成者	関西福祉科学大学　植田美悠
分類	講義
プログラム名	福島県社会福祉士会の取り組み
日時・場所	2013 年 8 月 20 日　ホテルバーテン
講師	福島県社会福祉士会　会長　島野光正氏

福島県に着いて、最初のフィールドワークとして、福島県社会福祉士会の会長でもある島野光正さんから福島県社会福祉士会の取り組みついて講義をして頂いた。

はじめに、福島県は他県の被害と異なる点である原発の放射線についての詳しい説明をして頂いた。被害は今現在も続いていて、人体の外部から被ばくする外部被ばくよりも食べ物などから体内に取り込まれる内部被ばくの方が懸念されている。そういった被害から逃れるために福島県内で避難する人、県外に避難する人を含め 149,949 人にも及んでいる（平成 25 年 7 月現在)。また、この原発被害では情報格差が問題になっている。ＳＮＳやインターネットによる情報提供も有効ではあったが、正確な情報か否かも明確ではなく、それらも使いこなせない高齢者や配慮が必要な方々には、情報とその方々をつなぐ役割の“人”の重要性がわかった。

震災後は、福島県社会福祉士会に対して、全国各地の様々な関係者の方から支援の申し出を頂いたけれど、安全がまだ明確にされていない福島県に来て支援するよりも、福島県から避難していった人たちにその各地で継続的に本来の業務で支援をしてほしいと“遠隔地支援”の重要性を訴えていた。

社会福祉士会の活動として、介護支援専門員協会、医療ソーシャルワーカー協会、精神保健福祉士会、理学療法士会、作業療法士会が連携し、相談支援専門職チームが発足した。活動目的として、①避難所生活の方のニーズを把握し、総合相談としてのワンストップ機能を果たす。②生活再建のため介護保険・福祉サービスの利用調整、心のケアを含めた、具体的な相談支援を行う。③避難者支援を主体とし、市町村担当の加重な負担にならないよう、常に連携して支援する、といったことを意識して行った。ビックパレットふくしまという大きな避難所を活動拠点とし、実情に合った支援が出来るように地域別に相談窓口を作り、要援護者のニーズに適した連絡調整をチームで行っていった。現在は、郡山市内の仮設に“ソーシャルワーカー室”を設置したり、法テラスへの協力など他職種・他団体と連携を取りながら、継続的な支援を行っている。

私がこの講義を聞いて感じたことは、継続的な支援の重要性である。島野さんから“遠隔地支援”の話があり、平常時機能している社会資源が機能しなくなった災害直後、または避難を余儀なくされた原発被害の被災地では、支援をしようとも、それは一時的な支援にとどまってしまう。その支援を避難先の各地域で行うことで、地域の社会資源も活用することができ、通常業務の中で継続的な支援ができる。元の生活には戻ることは難しいけれど、避難先で被災者が新たな生活の第一歩を踏み出すには、継続的なソーシャルワーカーの専門的な支援が必要不可欠だと思う。

作成者（大学名・氏名）	淑徳大学　新保江吏万
分類	講義
プログラム名	福島県社会福祉士会の取り組み
日時・場所	2013 年 8 月 20 日(火)19：00～21：00　ホテルバーデン
講師・インタビュー対象者	福島県社会福祉士会　会長　島野光正氏

福島県社会福祉士会会長の島野さんの講義を聞き、以下の通りにまとめた。

１．福島県民への支援→遠隔地支援

今回行った福島と他の被災地と違う点は原発があることであった。宮城や岩手は数多くのボランティアが入ったが福島はこの原発があるために入れず、加えて、放射能は人によって見方が違い、現状では正しい放射能データがわからないためボランティアを入れられなかったと話す。そのために避難した先で当たり前の生活を送れるように支援を依頼していた。つまり、福島への支援活動も大切だが、全国に避難した福島県民が当たり前の生活や避難先でサービスを受けられることができるように支援する遠隔地支援が必要であった。

２．主な課題

今回の震災で広域災害としての課題は、原発事故と情報不足＋情報格差が挙げられる。原発事故は終息が見えず続いていき、かなり広い範囲が避難をしなければならない。加えて、津波等の見える被災より、放射能問題の見えない被災の方が多くなっている。情報不足は個人情報がなければ医療支援をしたくても適切な診察ができない等の問題が起こり、情報格差ではインターネットやツイッターなどで情報提供し合うことができたが高齢者は使いこなせないといったことが起きた。避難上での課題は物流が止まることやガソリンが無いなど、他の被災地と同じ課題と、福島県のみの原発避難区域には立ち入り禁止となり救助に向かえないといったことがあった。

３．災害支援の相談援助として必要なもの

受援力（援助方法を把握）やファシリテーター（人を引っ張っていくこと）、ネットワークの形成、マネジメント力とコーディネート力、コンサルテーション、スーパービジョン、臨機応変な対応、積極性…といったものが SW には必要になってくる。加えて、危機介入理論の必要性もある。例えば、相談の仕方も「何か困っていることがありますか」と聞いてしまうと、相手も話しづらくなってしまう。「～ができますから～いりますか」といった聞き方をすると相手も話しやすくなる。つまり、SW は見えているあるいは見えていない「道具」を使い、被災者が必要としているものを把握しなければならない。そして、被災者は力がないわけではないので、もともとあった資源や力を使い、何かをしてあげるではなく手助けをすることが大切である。

４．相談支援専門職チーム→これからの SW の組織

相談支援専門職チームを組む理由はどんなに優秀な専門職も単体では、継続的・全体的な力を発揮することはできないためである。主に行ったことは地域の医療・福祉・介護のマネジメントや避難所の外と中をつなぐ役割である。この相談支援専門職チームの発足で当初、生活支援はその後に始まると判断したが、生活支援等の福祉支援はその人の周りの環境を整えつつ医療支援と同時に行うことが必要だったと話していた。

災害時の必要優先順位ではどうしても医療に目が行きがちで生活的支援は二の次になってしま

う。その後回しになってしまう生活的支援を SW が行う。つまり、DMAT（専門的な訓練を受け震災発生時に医師や看護師等がチームを組み素早く現場で支援ができる医療チーム）の SW 版を作るべきである。

以下は、福島県社会福祉士会の松本さんと和田さんの話をまとめた。

１．ジレンマを抱えての支援

自分の自己満足のためなのか被災者のためなのかというジレンマを抱えてしまう。解決するにはマニュアル通りにはいかないため、ある程度人を信じて行動したり自らで動いたりすることが大切と話す。被災者も表面上の心のケアや話を聞くだけというのはお断りという方が多い。つまり、SW は今、被災者が置かれている状況に気づかなくてはならない。そして、自分は良い事をやっていると思った瞬間に駄目になってしまう。しかし、忘れてはならないのが支援者も同時に被災者であるということである。そのため、支援者の支援が大切である。例えば、現場で働くスタッフの子供の日中預かりサービス、共感的な話をするグループ作りなどスタッフの家族を含めた支援をすることで支援者も安心して支援ができる。

２．災害における線引き

避難した人と避難しなかった人、補償金の有無といった様々な線が引かれていき人間関係が壊れていくことが多い。他にも価値観や風評から福島だけではなく他の県の人々の間にわだかまりができてしまい避難や支援に各差が生じることとなってしまったそうだ。これをなくすためには微力と思うが話を聴くしかないと話す。しかし『微力だけれど無力ではない』ため支援を継続して行くことが必要になる。

作成者（大学名・氏名）	文京学院大学　小野綾子
分類	講義
プログラム名	福島県社会福祉士会の取り組み
日時・場所	平成２５年８月２０日（火）・ホテルバーデン
講師・インタビュー対象者	福島県社会福祉士会　会長　島野光正氏

プロジェクト初日、一般社団法人福島県社会福祉士会会長の島野氏より「福島県の現状とソーシャルワーカー」について講義をしていただいた。島野氏の職場は社団法人郡山医師会、郡山市医療介護病院・企画調整課長兼保健福祉等事業推進室長であるということで、福祉と医療の連携についても話を伺うことができた。

まず教えていただいたのは、「放射線について」であった。福島県が震災により受けた被害は津波等もあるが、やはり放射線の被害であった。「原発」については現在日本各地で「反原発」など唱えられている。「原発は良くない。だから今すぐ無くそう！」と言ってもすぐにできることではないし現在はデメリットばかりが目立っているが元はメリットもあったため福島県に原子力発電所が存在しているのだろう。しかし原発の被害を受けていることもまた事実である。放射線は目に見えないため目に見えない恐怖から、震災発生後に支援物資等が届かなくなってしまったそうだ。また、福島県内では津波の被害は少なかったため家屋など多数残っているが線量の高い地域では立ち入りが制限されている。そのため「家があっても帰れない」という状況で、支援は被災した場所でなく、「避難先」となる。避難先も県の内外とかなり点々としており支援方法も様々となるが、島野氏は「避難先で当たり前の、普通の生活ができるように支援してほしい」と MSW 等にメッセージを出したそうだ。

震災や原発事故で感じたこととしては「情報格差」があったことである。限られた情報源の中から情報を得ることは困難で、被災した当事者であっても何が起こったかはメディアから知ったという。

災害支援としては「相談支援専門職チーム」を発足し、福島県社会福祉士会の他に県内の介護支援専門員協会、医療ソーシャルワーカー協会、精神保健福祉士会、理学療法士会、作業療法士会と連携し、チームとして動き出した。開始が早かったことには日頃からの関係づくりも影響していたと知った。また、5 月には福島県の委託を受けたということで、「県からの委託」という“道具”をもっていたことも知った。また「ビックパレット方式」を用い、要介護認定が申請したその日に出て、すぐにサービス利用が可能になるように制度を創ったことも分かった。

「支援者も被災者」ということで、支援にあたっている職員の子供も勤務先である病院に来て過ごすことなども行われていたことや、弁護士会との「生活と法律の合同相談」もビックパレットふくしまで行うなど、ソーシャルワーカーの目線をもつからこそできる支援がたくさんあったことが分かった。平時以上に対応の早さが求められ、福島県社会福祉士会の「会長」という立場で様々

な「指示」等も求められ、そして「予測」も「支援」も行う。
とても容易いことではないと感じたが、日頃からの関係づくりが迅速な対応の土台となっていたことが島野氏のお話から分かった。

作成者	関西福祉科学大学　中上裕菜
分類	視察
プログラム名	激甚被災地訪問
日時・場所	平成 25　年　8 月 22 日（火）10：00

８月２１日、私たちは朝８時３０分ごろ郡山を出発し、宮城県名取市の閖上地区へ向かった。閖上中学校に着き車を降りると、先に到着していた淑徳大学のメンバーが校舎の裏から出て来た。駐車場から中学校の方へ歩き、改めて周りを見渡して、まず「何もない」と感じた。震災が起こる前は多くの住宅があったのだろうと推測される場所には、ポツリポツリと点在する家を除き、今は緑色の草が生い茂っているだけであった。閖上中学校へとつながる道にあるガードレールは、押し寄せる波と引き波の力で地面とほぼ平行になるまで左右に折れ曲がって、校旗を掲げていただろうポールは斜めに倒れており、閖上中学校の正面の階段に設置されていた時計の針は、２時４６分を指したままだった。

瓦礫の撤去はすでに大方終えられている様子であったが、閖上中学校の周囲はまさにその時刻で止まったままのように感じられた。時計が設置されている階段の下に、犠牲になった子どもたちの名前が刻まれた石碑と、メッセージが書き込まれた机が置かれており、そして横浜の小学校から送られた色とりどの千羽鶴が校舎前に捧げられていた。

閖上中学校から車で１、２分のところにあるお寺へ行くと、そこには頭のないお地蔵さんや、頭だけのお地蔵さんが数体集められていた。津波で流されたものを地元住民の方が見つけて持ち寄ったものであるという。敷地内にある墓地には、墓石がないお墓が多数あった。墓石が津波で流されたために骨壺が丸見えになっているお墓を目の当たりにし、まだ新しい花が供えられていることに気づき、言いようもなく胸が締め付けられる思いがした。

その後、また車に乗り日和山へ向かった。閖上中学校の周囲と同じく草が生えた土地が広がっていたが、そこには小さな仮設の神社が出来ており、絵馬をかける場所の隣で、巫女さんがお守りを販売していた。小さな復興の兆しが見えた気がした。日和山の山頂へ上ると、周囲の様子がパッと視界いっぱいに広がった。この山頂へ避難した人は全員津波で流されてしまったが、隣に立っていたかまぼこ工場へ避難した人は助かったと聞いて、かまぼこ工場へ避難した人は、日和山に避難していた人が津波に飲まれるのを見てしまったのではないかと思い、その恐怖を想像してどうしていいか分からなくなった。

翌日、私たちは富岡町を視察した。震災直後の状況がまだそのまま残っていた。一階部分が削り取られた家に、流された車、二つに折れた電柱、平たくつぶれた自動販売機に津波の脅威を感じた。

富岡駅のホームの奥にはずっと草原が広がり、まるで海沿いの駅のようであった。その草原にはかつて住宅が建っていたと聞き、そこに町があったようには見えない風景に信じられない思いがした。

放射能の影響で戻れない地域や津波の被害を受けつつも徐々に人が戻りつつある地域、その両方について、被災者はどのように見つめているのだろうと感じた。かつてそこにあった景色、生活、それらが無くなってしまった地域もあれば、震災の影響を感じさせない地域もある。そこに芽生える人々の意識の違いはこれから解決していかなければならない問題の一つではないだろうか。

作成者（大学名・氏名）	淑徳大学　友利仁美　森菜摘
分類	視察
プログラム名	激甚被災地訪問
日時・場所	8 月 21 日（水）9：00～19：00　宮城県名取市、亘理町 他

激甚被災地訪問で、宮城県名取市では閖上中学校、中学校にある慰霊碑を守っている閖上の記憶 資料館、お寺や神社を訪ねた。また亘理町では住民の方にお話を伺った。それぞれの様子をまとめた。

1. 閖上中学校と学校周辺

ここでは、14 人の生徒が亡くなった。外にある時計は、地震発生時間 14 時 46 分で止まっていて、一階の窓ガラスは所々割れていた。二階以上の窓は、何ともなかったため津波は一階部分だけをのみ込んだことが分かる。校内は、人が入らないよう机が並べられていて中に入ることが出来なかったが、外から教室や体育館の様子を少しだけ見ることが出来た。中には、土や瓦礫は無く片付けられていて、物も散乱している様子はなかった。しかし、床は泥や土の跡が残っていて汚れていた。天井も壊れていて地震や津波の被害が伺えた。黒板には津波の後、生徒が書いたと思わるメッセージなどが多く書かれていた。

学校の周りの民家は一階部分が流され、二階部分が柱に支えられている状態だったり、家が残っていても家の中が散乱し住むことができなかったりする。津波がくる前の景色を見たが、沢山あった家が流され少なくなっていた。また、ガードレールは根元から曲がっていて本来の役目を無くしていた。

学校にある献花台には、沢山の花などがあり、慰霊碑には、津波よって亡くなった 14 名の生徒の名前があった。また横浜市立小雀小学校からは千羽鶴が送られていた。

2. 閖上の記憶資料館

ここでは、職員の話とビデオを見た。

宮城県名取市は 911 人の犠牲者を出し、閖上地区では死亡者 750 人、行方不明者 41 人がでて、中学校に 800 人、小学校に 1000 人が避難した。避難所は、段ボール一枚を仕切りしただけの場所であった。子ども達は、避難してきた当初、親に心配かけないよう笑顔で過ごしていたが日が経つにつれ、イライラしたり言葉遣いが悪くなってきて避難してから 2 ヶ月後には災害当時のことをフラッシュバックしたり精神的に不安定になってきた。そこで、子ども達に安心感を持ってもらう為に、災害以外のことを表現させる取り組みを行い、自分の好きなことを表現させて安心感を与え 2011 年終わり頃に「災害前の街」・「憶えている災害の光景」・「未来の街」をテーマにジオラマを作製し津波などの災害を克服させた。

また、大人達は避難してからずっと不安を心の中に抱え閉ざしてしまい、自分の思いや心の声を出せずにいた。そこで大人の為の心のケアとして閖上アミーズを作った。そこは、編み物をしながら何気無い話や災害当時のことなど様々な話を語る場所となっていった。また、販売部を作り自分達で全国に販売することで生き甲斐や夢を持てるようになった。また、閖上中学校に通って

いた子どもを亡くした家族の語る場所として、閖上中学校遺族会が作られた。職員さんは、この資料館を作ることによって、災害の記憶が残り、それが次世代の遺産となるよう世界に発信できると話してくれた。

3. お寺と閖上湊神社

資料館付近にあるお寺は、柱しかなく中が丸見えだった。周りにあるお墓は上の方の墓石が流され下の台しか残っていなかった。そのため、どこに誰のお墓があるのか分からない状態だった。また夏ということもあり、草が生え、どこにお墓があるのか分からないところが多くあった。そんな中でもお盆には自分の家のお墓にお墓参りしている姿があり、胸が痛くなった。

小高い閖上湊神社では、災害当時 1000 人近い人が避難したが、津波は予想をはるかに超えたため 800 人以上の人が犠牲になった。ここに来れば安全と思い避難したのに、津波が迫ってきて、そこにいた人たちはどんな思いだったのだろうか。神社には、人々の笑顔と復興を願う絵馬が飾ってあった。

4. 亘理町、農家の人のお話

亘理町では車での移動ではなく自分達の足で歩くことになり、見るだけではなく実際に被災した方から話を聞くことにした。

1）1 組目の住民の話

震災当時、自宅にいて津波がきた時は家の 3 階に避難。1 階は津波により浸水してしまった。津波で流れてきた水が引かなかったため、2 日半 3 階で過ごした。2 日後自衛隊のヘリコプターで救助され市民センターへ行くも、地区が違う為小学校へ移動、そこから仮設住宅に行き、そこで過ごしたあとボランティアなどの手伝いもあり、自宅の 1 階をリフォームして戻ってきた。

2）2組目の住民の話

災害当時、畑に出ていて夫が家族に津波が来ることを伝え、家の2階に避難。津波による水が引かないため3日間3階で過ごしたあと自衛隊により救助され、大沼中学校に避難した。避難所にある名簿や伝言板で奥さんのお兄さんが探し出してくれた。3ヶ月ほどお兄さんの家にお世話になり、そのあと仮設住宅へ移動した。その間、知り合いの大工さんに家を直してもらったあと自宅に戻ってきた。

話を聞いたときに、「私たちは家族全員無事だったけど、近所の人が・・・。」と話していた。自分たちも被害に遭っており大変な状況の中、「他の人達の方が」と言って自分達はまだいい方だと思う人達が多いと感じた。このような思いが強いため、ニーズ
を表に出す人が少なくなってきているのではないかと考えた。

作成者（大学名・氏名）	文京学院大学　　木村恵理
分類	視察
プログラム名	激甚被災地訪問
日時・場所	2013 年 8 月 21 日、22 日　宮城県名取市、福島県相馬市・富岡町

8 月 21 日に宮城県名取市閖上地区と福島県相馬市周辺。22 日には、福島県富岡町を訪問した。この福島と宮城という二つの地域を訪問し、震災の被害というものにも違いがあることが分かった。今回で二度目の訪問となった宮城県の閖上地区は、昨年と比べ、変化のあったところは草木が覆い茂ってきたところぐらいであると感じた。しかし、街を歩いてみると、その中でも少しずつ変化が見られてきたことが分かった。それは神社が流された跡地でお守りを売る姿が見られたり、地元の特産物を売る場所などが設置されたということがあった。少しずつではあるが、復興が見えてきたように感じた。そして、福島県相馬周辺では、一見普段通りのような風景が広がっているように見えたが、よく見ていくとその普段通りと思えた家々の中には津波が押し寄せた傷跡があったり、人が住んでいたり、離れていったりとが混在していることが分かった。

相馬に向かうの道の駅で地元の男性と出会った。震災時に撮られた映像を食い入るように見ていた私たちに、その方は「その映像は辛いでしょう？」と話しかけてくださった。その方は、暗い表情を出さないようになるべく笑顔で話されていたが、話してくださる内容は自分の家が流され、今は仮設で住んでいるがいつ帰れるかは分からない、というものであった。私たちが返す言葉も出なく黙っていると、男性は「でもうちは家族が無事だったけど、他の家では亡くなった人がいっぱいいて、その家のほうが辛いんだ」ということをおっしゃっていた。東北の人は、自分よりもっと辛い人がいるからと物資なども貰うのを遠慮する人がいると聞いていたが、この男性とのやり取りからそれを垣間見たように感じた。

そして 22 日には、インタビューの後福島県富岡町を訪れた。ここは原発 30 キロ圏内のところであり、現在は立ち入り禁止は解除されているが人が住んでいる様子は見られなかった。人が住まなくなった町は、震災の時から時間が止まったように感じた。しかし、街を歩いてみると確かに以前は人が住み、笑い声にあふれた街だったのではないかと想像ができた。目に見えない原発という恐怖から、また再びそこで生活することができずにいる、そこで以前は暮らしていた人々の苦しみを想像した。その苦しみは、原発という被害を直接経験していない私たちには計り知れないものだということを思った。そのような苦しみを考えたとき、私たちが目指すソーシャルワーカーは、どのような支援ができるのか考えていかなくてはならないと思った。福島県の震災は、目に見える被害の他に見えない被害というものもあり、支援の難しさを知ることとなった。

宮城県名取市閖上地区

作成者	関西福祉科学大学　中上裕菜
分類	インタビュー①
プログラム名	ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト
日時・場所	平成 25　年　8 月 22 日（火）10：00
インタビュー対象者	渡邉明社会福祉士事務所　渡邉　明氏

私達は、独立型の社会福祉士事務所を開いておられる渡邉明さんにインタビューをした。渡邉さんは大学を卒業後、肢体不自由児施設で約 11 年間児童指導員として勤務し、その後、知的障害者更生施設に 10 年勤められた。現在は、福島県社会福祉士会権利擁護センターぱあとなあ福島の運営責任者と、障がい者の成年後見人や、いわき明星大学の非常勤講師などをされておられる方である。震災時は障がい者の権利擁護や法人後見を行っているＮＰＯ法人の職員をされていた。

震災直後の状況

渡邉さんは、1978 年に発生した宮城県沖地震も経験しておられ、今回はあまり動転することはなかったが、揺れが異常に長かったと感じたという。その時は、いわき市総合保健福祉センター3 階で持たれた会議に、ＮＰＯ法人の同僚と参加していた。揺れがおさまり、安全を確認した後、会議は中止。それぞれが自分の事業所へ戻ることとなった。地震による道路への影響がなかったようなので、車の中でラジオを聞き、情報を収集しながら、いわき駅方面に進んだ。事業所が入っているビルは、地盤沈下をおこしたために、建物が一部壊れている状態であった。ビルの前に公園があり、避難場所となっていたためそちらへ行き、携帯のワンセグ放送を見て、津波の被害が相当なものであることを初めて知った。震災が起きた 3 月 11 日は金曜日で、土・日は休みだったため、ビルに入り、倒れたロッカーなどそのままで、事務所の戸締りだけを行い、職員はそれぞれ家に帰ることとなった。

震災直後の活動

震災直後の 3 月 13 日、個人で後見人を引き受けている利用者がいる施設に行き、安否確認や面接を行った。その頃には 12 日に起こった福島第一原子力発電所 1 号機が水素爆発を起こし、原発から 20 ㎞圏内の住民に避難指示が出ていた。施設は原発から 40～50 ㎞圏内の場所であったが、避難地域が拡大されることになるかもしれないため、施設長とその後の対応について相談を行った。施設の職員さんも大変な状況だったため、食事介助の手伝いをされた。その時、後見人をされていた利用者はとても怯えた様子であったという。余震がくるため、不安を覚える方が多く、そのような利用者には手を握って対応されたということであった。その後、ＮＰＯ法人の活動に戻り、法人の職員や理事長を交えて今後の対応を相談され、法人が後見人をしている方や財産管

理を引き受けている知的障がい者の方がいる施設や、グループホームの事業所の職員と電話で連絡を取りながら安否確認を行った。

14 日に起こった第一原発 3 号機の爆発を機に、避難する住民が多くなり、グループホームで生活をされている方も避難する可能性があるということで、銀行からお金を引き出し、グループホームや施設の責任職員へ配る作業を行った。その後、銀行が閉鎖し、ＡＴＭも作動しなくなるなど、現場では切迫した雰囲気が伝わってきたという。そして携帯やネットでグループホームや施設の職員と連絡を取りつつ、ＮＰＯ法人としては 22 日まで仕事が中断になった。

その間、県社会福祉士会の理事をされていたため、会員の安否確認を行ったり、避難所の手伝いなどもされていた。24 日からはグループホームにいる被後見人や、財産管理を引き受けていた方が長野や横浜へ避難することになり、長期間の避難となるため、グループホームの事業所から送られてくるグループごとの避難先の名簿を確認。再開し始めた銀行から、当座の生活費としてのお金を払い出し、一人 1～2 万円ごとに袋に仕分けし、渡し方を行った。さらに、関係する事業所と、その他の利用者がどこに避難しているか、家族と共に避難しているのかなどの情報交換を行っていた。

避難所の様子

自宅近くの小学校には、避難地域の特養や老健、救護施設の３つほどの施設が利用者と職員共に施設ごと避難してきていた。一般の方も避難してきており、その方々が避難している場所とは別に、教室を借り、床がタイルだったので段ボールと毛布を敷いて休まれていた。福祉避難所はいわき市にはなく、原発事故に至っては、こんなに多くの人が避難してくるということは想定されていなかったという。施設ごと避難してきていたので施設の職員さんが一緒だったため、そのような状況でも利用者への配慮を行うことができた。避難所での食事はおにぎり１ケ、菓子パン、かまぼこがそのままという状態もあったという。渡邉さんはかまぼこを自宅に持ち帰り、食べやすくするために切って避難所へ持って行ったり、食事介助、トイレ介助の手伝いなどをされていた。避難所で一番大変だったことはトイレであり、水道もなく、教室の廊下に置いたポータブルトイレを段ボールで囲って使っていた。一緒に来ていた施設の職員の方も被災者であり、家族がバラバラに避難していた人もいつどうなるか分からない状況で、放射能の心配もあり、全員精神的にギリギリの状態で、疲れきっていたという。天皇陛下のメッセージや、自衛隊のヘリが原発へ海水を投下する様子が特別放送でずっと放送されていたので教室のテレビで皆それを見ていたということであった。津波の被害があった場所は、小学校・中学校が避難所となっており、物資がうまく届かない、ガソリンが入手できないといった問題があった。

地域コミュニティの崩壊

いわき市の人口は 33 万人だった。後にいわき市が行ったサンプリング調査では、約半数の 15 万人が市外へ避難したという。日常、回覧板を回したりしている自宅のある自治会の隣組は、近所の人がいなくなったため、市から連絡の仕組みが機能しなくなった。民生委員の方がいなくなった所もあり地域コミュニティが崩壊した感じがした。新興住宅地だったせいか、住民同士の関係も強くはなく、隣の住民に何も言わず避難する人がいた地域もあった。一方、その中で、市内では、きちんと地域コミュニティが保たれていた地域もあり、普段から近所づきあいをしてい

ないとこのような災害があった時、うまく協力しあえないことを実感したという。

これから先の支援について

災害直後はソーシャルワーカーだから何かするというのではなく、おかれた状況の中で何が出来るかということ。そして、大事なのはそのことを記録に残すことであるという。福島県は原発事故によって現在も 15 万人近くが避難しており、見通しが立たない不安や、住民票を移していないので市民のサービスを受けられない人もいる。被災者のニーズは、家はあっても放射能の汚染で住めない方、家が流されてしまった方がいたり、同じ市内でも、戻れる地域と戻れない地域があったり、原発事故による賠償の差のことであったりと複雑多岐に渡る。地震による災害だけであれば、仮設住宅から復興住宅への流れがあり、その後の支援について考えることが可能であるが、福島県ではこうした見通しがつかない状態である。高齢者であると、生まれ育った故郷を離れ、これから先、戻ることはないかもしれず、生きる意欲を失くしてしまう。漁業をされていた方であったりすると就労意欲を失うこととなる。そのようなストレスや不安などから、高齢者虐待や児童虐待のケースも増加傾向にあるという。また、福島県内でもどの地域に避難するかによって生活環境が全然違うということもあり、その地域での生活の仕方についての支援も必要となる。例えば会津などでは冬は豪雪となるが、今まで雪があまり降らない地域で暮らしていた高齢者の方は雪が降ることによって、転倒で骨折してしまったりすることもある。これらのニーズを汲み上げ支援に繋げていくことが重要である。他にも「原子力事故被災者支援法」という法律ができており、具体的な政策は今後整備していくということだが動いておらず、制度へつなげるサポートも必要である。また、原発事故による賠償金を請求できるにもかかわらず、請求していない人が 1 万人ほどいるという。障がいがあって一人で暮らしている方や、高齢者の方、いろいろと書類を用意するのが面倒だという方を弁護士や司法書士につなげるサポートも必要となってくる。

インタビューを通して

今回のインタビューを通して感じたことは、やはり復興はまだまだ進んでいないのだということだ。街並みや仮設住宅などの設置は進んでいても、心の問題や、街の住民の関係などはまだまだ修復されていない。テレビなどで仮設住宅の映像や片付いた瓦礫の映像を見ると復興は順調に進んでいるかのように感じる。しかしその実、原発事故による先の見えない不安や、そこから発生するストレスなど、新たな問題が浮かび上がってきている。また、渡邉さんのお話を伺い、ＮＰＯ法人としての活動だけではなく、避難所の手伝いやグループホームの方との情報交換など、災害時にその時にできることは何でも行っておられ、社会福祉士はさまざまな状況に介入するのだと分かった。

作成者（大学名・氏名）	淑徳大学　新保江吏万　森菜摘
分類	インタビュー
プログラム名	ソーシャルワーカーへのインタビュー
日時・場所	8 月 22 日(木)10：00～12：00　福島県あだち地域相談センターあだたら
講師・インタビュー対象者	渡邊中氏

福島県あだち地域相談センターあだたらの渡邊中氏からお話を伺った。

１．渡邊氏のプロフィール

渡邊氏は、知的障がい児の入所施設へ入職し、長らく知的障がいの子ども等の支援に携ってこられた。その後、福島県から委託を受け、県南地域の障がい児（者）の地域生活するために必要な相談援助を行ってきた。現在は、福島県からこの事業所が委託を受け、県北圏域で主に二本松市、本宮市、大玉村で障がい児（者）の地域での生活支援行うためのアドバイザー兼相談支援専門員の業務を行っている。

２．震災直後の様子と支援

ライフラインの被害状況は地域によって偏りがあり、停電した地域としない地域があった。主に地震の影響は「中通り」、特に、郡山市、須賀川市等の建物被害が特にひどかった。また水道などが止まってしまい、お風呂に何日も入れない日も続いていた。

情報収集すべき手段としての電話回線が利用できず、関係機関との連絡が取れなかった。

主な情報収集は、メールなどのネットワークのほうが動いていたため、メールを使って外部との連絡をしていた。

渡邊氏は、１人暮らしの筋ジストロフィーの方の家を訪問していた時に被災した。その方の安全確認が取れ次第、他のひとり暮らしの方の家々も回り安全の確認を行った。

被害が甚大であったこともあり、地域で支えていたホームヘルパーも避難し始めたため、

また支援する資源が乏しかった事もあり、病院を探して避難入院の依頼をしたこともあった。

渡邊氏が働いている施設は相談センターということで様々な相談が寄せられたが、どこから手をつければよいのかわからなかったと話す。加えて、関係機関を含めた随所から様々な情報が流れてくるため、しばらくは錯綜してしまい、情報の整理をすることに追われていた。

また、障がい者支援施設を利用している人は非常食が食べられない方が多く、知り合いの業者などにお願いして食料を買い、調理をしなければならなかった。非常食は便利だが、食べられないのなら多く持っていても意味がない。今回のことで災害備蓄用品のことも見直す必要があると感じた。

３．インタビュー内容

１）地域による支援のあり方

福島県は、「中通り」、「会津地方」、「浜通り」という地域に分けられる。今回の被災された方々は、浜通りの双葉地方を中心とした地域の方々で、情報も不十分なまま、中通りや会津地方へ避難してきた。

三地方のそれぞれの風土があり、なかなか馴染めない方々もいた。地域によっては福祉サービ

スが不十分で、どのような対応して良いのかも、被災地行政も対応に苦慮していた。避難者を受け入れている行政もニーズに対応できず、また要援護者への対応に苦慮した。環境因子が変化する中で、個人の特性をどのように受け入れ対応するか悩んだ時期であった。

２）心のケア

障がい者は特性によって避難所には入れなかった。健常者と同じ避難所にいっても理解を得られていないため、避難所へ行けなかった、入れなった障がい者がいたことも事実である。特に身体障がい者はバリアフリーとなっていないところがほとんどのため、避難所で暮らすことができず不平不満がたまり、それをどこにぶつけていいのかがわからないなどの不満が出てきてしまった。そのため、心のケア、これからのことを一緒に考えたりするというよりは、不満を聴くということが必要となっていたと渡邊氏は語った。その不満などを聴いていき、受け止めていくことで心のケアができるのではないだろうか。しかし、聴くことは誰でもできることであるため、ソーシャルワーカーは、今、何が必要なのかを考えて動く必要がある。

３）見えない被害

福島は震災のほかに原発事故の影響で放射能汚染の見えない被害も受けている。そのため小さい子どもや妊娠している女性などは、放射能汚染から逃げるためにほかの県に避難していく人も多くみられた。渡邊氏は地元での生活を選択し、「私はここで暮らしていきたい。やはり自分が住んでいる地域が一番だから」と話してくれた。

今、原発問題で故郷に帰りたくても帰れない人たちが多くいる。しかも先が見えないためどうなるかまだ分からない。望郷の念を抱える被災者をいかに支援していくのかなど、想いを受け止めた支援が大切になってくるのではないかと感じる。

４）必要なもの

これから必要なのは長く、深く支援を続けていくことだろう。被害の少ない地域同士で情報の交換などを行い、そこから地域が連携し、支援の範囲を広げていくことが大切である。また、震災が起きた場合、自分の受け持っているフィールドの確認をし、何が使えて何が使えないなど社会資源を把握することや、物資のこと、ライフラインが止まった時などの連携も大切である。つねに家族と「地震が起きたときはどうするか」、また「近くに障がい者や高齢者がいた場合、誰が声をかけ一緒に避難するのか」などを話し合っておくと、もしもの時、一人で取り残されてしまう人や、逃げ遅れてしまう人がいなくなるかもしれない。そのためにも、地域のネットワークはこれからも欠かせないものになるといえる。

５）災害時におけるソーシャルワーク

今回の震災は想定以上の被害だったため、ソーシャルワーカーも震災直後は「仕事だから」というわけではなく、「人として何をするべきなのか、何ができるのか」を自分たちで考え行動していた。そのため、目の前にあることへの対応で精一杯で、それに時間がかかってしまったという。さらに「被災者にとって必要なものは何なのか」など、自分が考えたものと相手の求めているものが違う場合が多いため、「相手が求めているのは何か」を考えていくことが大切であることがわかった。

震災から２年たった今、震災の混乱状態も落ち着いてきている。その中で、これからの生活に不安を持っている人、心の整理ができずに前に進めない人が出てきている。そのような人にどう寄り添って一緒に歩んでいくのかなど、今後の課題であろう。また、地域のつながり、顔の見え

る関係も必要だということが今回の震災を通して再確認することができた。ソーシャルワーカーや福祉の人だけが動くのではなく、地域の人がどう助け合っていくかなども必要になってくるのかもしれない。また、今回、地域によるサービスの違いなどが目立ち、その人の情報が無く困ったことが多々あったという。これを機会に地域でサービスを変えるだけではなく、サービスを一から創っていくことも大切だということが分かった。

作成者（大学名・氏名）	文京学院大学　木村恵理
分類	インタビュー
プログラム名	ソーシャルワーカーへのインタビュー
日時・場所	平成 25 年 8 月 23 日（金）・介護老人保健施設　楢葉ときわ苑
講師・インタビュー対象	介護老人保健施設　楢葉ときわ苑　　施設長　渡辺 幸雄氏

楢葉ときわ苑の施設長である渡辺幸雄氏にインタビューをさせていただいた。

楢葉ときわ苑は、現在いわき市にて仮設の老健として運営されている。施設の表札には“仮設”楢葉ときわ苑と書かれていた。建物はとても立派で、一見仮設ということは想像できない。現地に到着し、表札を見た時は、なぜ立派な門の表札に“仮設”と書いたのか疑問に思った。その理由は、インタビューの中でお聞きすることができた。インタビューでは、老健の施設長として、そしてソーシャルワーカーとして震災時どのような活動をしたのかということを聞くことができた。

まず、震災時は利用者 88 名と職員 37 名で、「二時間」で避難しなくてはいけない状況であった。施設長としてどのように避難するかを考え、判断していく必要があったことを伺った。私たちは、混乱の中で、そのような重大な判断をするときにどのようなことを考えていたのかということをお聞きした。渡辺さんは、何よりもまず、命を守るということを最優先して何事も決めていたということを話してくださった。震災というような重大な時に判断しなくてはいけない時に、何を最優先していくかということを決めることのむずかしさと大切さを知ることができた。

そして、一次避難としていわき市の小学校へ集団避難した。集団避難を行う中で、老健の利用者の中にはまた新たな問題が発生していることが分かった。それは、避難先で食べ物を支給されても、嚥下機能が低下した高齢の利用者の中には、支給されたおにぎりやカップラーメンを、そのままの状態で召し上がることが難しい方もいた。そのような方へ食事を提供するため、おにぎりやカップラーメンなどの食形態の工夫なども行ったことが分かった。そのような避難所での生活から、健康被害が出てくることもあるなかで、職員の疲弊などもでてきた。

震災の中では、職員もまた同じ被災者であり、それぞれが苦しみを抱えながらも利用者を支えるという、ただそのことだけを考え介護していたそうだ。職員も一人の人であり、家族もいる。震災という状況のなかで共に避難してきた利用者の面倒をみたいという考えもある中で、家族と安全な場所まで避難したいという思いもあったと感じる。その二つの思いの中で、職員も大変思い悩んだのではないかということを伺った。

そのような職員の思いも汲み取って、これからも利用者の介護を行うという選択、あるいは家族と共に避難する等、どちらを選んでもかまわないと職員におっしゃったそうだ。施設長の渡辺さんは、一人一人を個別としてみるということは、この震災という状況の中では大切なことであったと感じたそうだ。このような個別化の考えは、ソーシャルワーカーの基本ともいえる原則に

もあるため、ソーシャルワーカーであったからこそ考えられたものなのではないかと感じた。

そして、現在の仮設老健開設の話になった。避難をするなかで、まず第一に大切だと考えていくことは命を守るということであった。しかし、避難生活の中で利用者も職員も段々と疲弊していく中では、命を守ることも簡単ではない。そのために仮設老健の開設を行うことが始まった。しかし、国や県に開設の件で問い合わせをしても、初めての試みであるということから、答えが出るまでにも時間がかかりすぎてしまうという状態であった。

震災から復興に向けて立ち直っていかなくてはならない中では、公的な制度が機能せず、使えない場合が多いことが分かった。

最初に疑問に思った、なぜ表札に“仮設”楢葉ときわ苑と表記したのかということに対して渡辺さんは、ここは仮設で、いつかは故郷に帰るという思いを持って生活していくことで希望をもって過ごすということを話してくださった。私は、利用者の中には認知症の方もおり、震災で避難生活が続くとパニックになったりしないのかということが気になっていた。このことをお聞きすると、意外にも利用者の方はパニックなどは起こさなかったということを聞いた。認知症ではない利用者も、仮設の老健で生活して故郷に戻りたいと話されることはないのかと思ったが、帰りたいと思っていったとしても口に出される事はないということをお聞きした。

最後に、“復興”ということをお伺いしたとき、まだ、「楢葉ときわ苑は復興を行う段階ではなくて今日、明日だけを見つめて今を生きるということだけです。」ということをきいた。震災だけでなく、それに加え原発という被害にもあった中では、復興を考えるよりも今をどう生きていくかといことを考えることが大切だということが分かった。

作成者	関西福祉科学大学　福井　弥生
分類	インタビュー②
プログラム名	ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト
日時・場所	平成　25 年　8 月　23 日（金）
インタビュー対象者	K市　T町仮役場　A さん

・A さんのプロフィール

A さんは、東北福祉大学を卒業した後、高齢者福祉施設で平成 11 年まで働いておられた。その後、介護保険法が出来ると、平成 12 年から 1 年ほど居宅のケアマネージャーとして勤務された。平成 13 年から 17 年までは、在宅介護支援センターで働き、18 年から地域包括支援センターで震災当時まで勤務し、震災後は、現在まで週 2～3 回ほどスクールソーシャルワーカーとして働いておられる。

・震災当時の状況

3 月 11 日の地震が発生したとき A さんは、地域包括支援センターにおられ、スタッフと地域を区分けして、1 人暮らしのお年寄りの安否確認をすることにした。スタッフとは事前に、誰か病院へ行かないと行けない状況や、支援が必要な場合、お互いに電話をするか、なければそのまま自宅へ帰宅しようということで別れていた。

次の日の朝 5 時くらいに避難命令の放送が始まり、地域包括支援センターの職員はそれぞれ避難したが、たまたま A さんが所属されている法人の中には特別養護老人ホームがあるため、A さんは特別養護老人ホームの利用者の方が避難するなら手伝わなければいけないと考え、朝に施設に向かった。そのときの施設の状況は、避難するかどうかまだ分からない状況だった。またこの施設は、要介護度 4～5 の重度の高齢者を対象とする施設で、入所者 80 人の内 48 人は胃瘻患者で、とりあえずは様子を見るということで、11 日から勤務していた職員がそのまま泊まりこみ、12 日はライフラインが全てダメになったので、非常食としてとってあった水で食べ物を練り状にして高齢者に食べさせていた。

同日、15 時半に福島第一原発において水素爆発が発生し、「とにかく西へ逃げろ！」と行政から言われたため、観光バス 6 台に 2～3 時間かけて高齢者を乗せ、座位を取れない患者はスタッフが後ろから立ったまま抱えていた。

郡山方面へ避難するにも、スタッフも含め 90 人以上という数の為、入れる避難場所がなかなか見つからなかった。深夜 2 時に宿を見つけるが一時的なものだったため、次の日に、病院が古くなり建て替えて新しくした病院の古いほうの一角を借りた。1 週間ほど生活し、高齢者が多いままではなかなか避難することが難しいため、他の特別養護老人ホームと交渉し高齢者を安全な場所へ避難させた。

A さんは、高齢者の避難に各施設と交渉したあと、一旦福島を離れ横浜へ行き、戻ってきたときに、自身が働いていた地域包括支援センターはビックパレットへ避難していたため、そこへ向かい 1 ヶ月ほど生活をされていた。その中であった様々なニーズは、まず寝たきりだとトイレへ行きたいのに行けない、和式を使用することが難しいなどがあり、子どもは学習スペースがなかったため避難場所の一角へ作ったり、子供のストレスを発散するための遊び場を作るなどの支援

を行っていた。しかし、ビックパレットという場所は、多人数、他市町村からの被災者が集まる場所だったため、各階のどこかの部屋を借りて行うという支援しか出来なかった。また、そういう支援を続けていく中で、自治会が形成されその中でも連携して支援を行っていた。

県の社会福祉士会も後に介入し、今まで動くことができたのに避難先で全く体が動かなくなった高齢者を再び元の生活に近い状態へ戻すために、4 月半ばから A さんは福島県や他県のデイサービスに交渉し、サービスに繋げていった。避難場所では自衛隊が簡易の風呂を作ってくれたが、介護が必要な人は入れず、そういった中で必要とされてきたニーズは安全で、安心して衣食住が出来る場所が欲しいということであった。

・地域コミュニティが崩壊した中でソーシャルワーカーが出来ること

地域包括支援センターとは本来、地域形成をしていきながらコミュニティを形成したり、完成されたコミュニティの中で必要な支援を行っていくものであるが、震災が発生してからはそういったことは出来ない。地域コミュニティが崩壊した中で出来ることはないのかもしれないが、緊急事態だからこそソーシャルワーカーが行政等の役割をしていき、支援をつなげていくことが必要である。

・福島での今後の課題

震災直後は物質的支援、例えば歯ブラシ 1 本や服はとても有難いものだったが、復興へ向け時間が経過していく中で人のニーズは変わっていき、物質的支援の有難さに子どもたちは段々と慣れてきてしまっているのが現状である。物質的支援よりも"1 歩前へ踏み出せる支援"が必要である。それは、子どもや若い人たちがもらった支援をどう返すか、またその時に感じた有難さなどを、次に起きる災害へ生かせるような後押しであり、それを A さんは発信しつづけていかなければならないと仰っていた。

・A さんが今後、被災地から伝えたいこと

東北大震災で津波被害や原発被害などがあり、日本中から支援してもらいその有難さが自分の身に染みたので、ぜひこれを今度何かあったときに、どんな形ででも支援したい、全国へお返し出来たら良いと言われていた。

・所感

インタビューをさせて頂き私自身がまず初めに感じた事は、宮城と福島での復興のめどがどのくらい違うのか、ということだ。また自分の引き出しを沢山持っておくことによって、社会資源を有効に、かつ他との連携をはかり、素早い対応ができるということを感じた。また A さんは、震災時は何も出来なかったと言っていたが、行動している中で日ごろからの連携があるからこそ出来たことが沢山あるとわたしは考えた。

作成者（大学名・氏名）	淑徳大学　岡田彩香　友利仁美
分類	インタビュー②
プログラム名	ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト
日時・場所	8 月 23 日(金)　10：00～12：00　いわき福音協会法人本部
講師・インタビュー対象者	藁谷健一氏

社会福祉法人　いわき福音協会法人本部の藁谷健一氏からお話を伺った。

1.　藁谷氏のプロフィール

藁谷氏は、知的障がい者に関する仕事に携わっており、昭和 49 年から約 10 年間、地域の中で暮らしていけるように畑仕事や内職など就業支援を行っていた。その後、事務職に異動して会計の仕事に携わっている。

「障がい者総合生活支援センターふくいん」を一つの事業として、現在は 33 ヶ所のグループホーム、またはケアホームで 140 名の利用者が生活している。その他にも福祉ホームがあり、そこでは 10 名の利用者が生活しているので、合計して 150 名の利用者の地域生活のお世話をしているということになる。被災後は通常業務に加え、支援物資の仕分け、ボランティアのコーディネートや情報を各施設・事業所に流すなど様々な仕事を行う。

2.　インタビュー内容

1)　震災直後の様子

震災当時、藁谷氏は事業所内で職員の採用面接をしていた。最初は外へ避難し、揺れが収まってから施設内に戻り、その後、通所施設の様子を見に行った。この地震の影響で、電気は無事だったが、水道が止まってしまい、水と食料の確保が大変だった。

2)　支援の方法

すぐに救援物資が来なかったため、職員の自宅の井戸が使えるとか、少し離れたところの水道は使えるとか、どこの水道なら使えるのかという情報をかき集め、使える水道から水を運んだ。また、トイレの水は小さい川から職員が毎日運んで対応していた。そして、震災から 2～3 日後に救援物資が届くようになったので、1 日に 1 人当たりペットボトルの水を朝と夕方で 2 本、おにぎり 1 つまたはパン 1 つを配ることが出来た。

3)　原発事故発生による避難

グループホーム利用者は長野県の「西駒郷」に 70 数名、神奈川県に 30 名ほど一時避難した。職員も一緒に行ったが、長野県には 5～6 人、神奈川県には 4 人程しか行くことができず、避難先の施設でいろいろお世話になった。また、事務所近くにある障害児入所施設にいる重症心身障がい児は 18 歳以上の人もいたが、小さな子供は放射能の影響を受けやすいこともあり、県内・県外を含めて同じような施設、設備が整っていて、職員、看護師、医師が揃いお世話してもらえるところに避難した。入所施設のほうでは、原発の情報をテレビやラジオで聞いて、屋内退避区域が 30 キロ圏から 40 キロまで広がったらみんなで避難することを決めていた。グループホーム利用

者は、4 月半ばに避難先から戻ってきた。

4)　連携・つながり

地震が起きた次の日から毎日会議を行い、各施設・事業所の状況報告を受け対応をしたり、キリスト教会とのつながりがあったため関係者が物を運んでくれたり、いろいろなところから支援物資が来たため、その仕分けをしてファックスで情報を流した。また、ガソリンの情報を共有し、交代でガソリンを入れに行き、職員同士で送り迎えをした。閉鎖状態だった通所施設の職員は、給水車を使い浄水場と施設の間を行ったり来たりして給水を行った。大きな法人だったからこそできた連携である。外部では、放射能を測定するガイガーカウンターの寄贈やいろいろなところから義捐金を頂く等の支援を受けた。支援を受けるだけではなく、職員が足りない施設に一人ずつくらい職員を派遣している。こうして支え合いながら連携を取っていった。

避難先を提供してくれた Y さんのつながりによって、NPO の理事長がボランティアに来たり、施設の畑で育てた作物を関西で売ってくれたりなど、関西からの支援が多く来て、今まで無かったつながりが出来た。そして今でもその支援は続いている。

5）これからの課題

今回、職員にかなりの負担がかかったので、人手不足の状態から抜け出すこと。情報収集や状況の理解のために職員で何度か集まり会議をしたことから、平時から職員同士の連携を作り「こうなったらどうする」ということを予め決めておく。食料の確保に時間がかかったことを受けて、長期間もつようなものを備蓄しておくこと。寒さ対策のために、毛布などを保管しておくこと。

6）ソーシャルワーカーとして出来たこと

目の前のことに手いっぱいで、ソーシャルワーカーとしては何も出来なかった。そんな状態の中で、今出来ることを精一杯やった。しかし、藁谷氏は一職員のような立場ではなく職員全体をまとめて、いかに支援を円滑に進めていくかを考えていく立場だったため、その場から動くことが出来ないということもあった。

7）ニーズを満たすために必要な支援

まずは希望を吸い上げて、どう対処したらいいのかを聴き取る。施設を利用していた人や入所施設にいる人からは、すぐに対応できて窓口もはっきりしている。しかし、サービスを利用して来なかった人や地域で生活している人については、相談支援事業のような窓口がしっかり聴き取りを行い、ニーズを把握して、どういうサービスがあるか紹介していくとか、つなげていくという役割が大事である。しかし、相談窓口の職員が少ないため相談を受け切れていない。そのため、職員を増やしたり、他の市や町との連携が必要となる。

作成者（大学名・氏名）	文京学院大学　小野綾子
分類	インタビュー
プログラム名	ソーシャルワーカーへのインタビュー
日時・場所	平成２５年８月２３日（金）郡山市医療介護病院
講師・インタビュー対象者	福島県社会福祉士会　事務局　和田由紀子さん

福島県社会福祉士会の事務局である和田由紀子さんにインタビューをさせていただいた。

和田さんは特別養護老人ホームで、相談員等を経験し、現在は一般社団法人の福島県社会福祉士会と福島県介護支援専門員協会の合同事務所で事務局として活動されている。震災後には、社会福祉士と介護支援専門員の両方の専門性を活かし、支援物資の“交通整理”等の役割を担われていた。

震災直後、和田さんは医療職の必要性・重要性を感じたそうだ。福祉職としての様々なケアは一段落してからと思い、初めはただ、事務所を頼りにしてくる人がいた時のために、待機されていた。寒さと静けさの中に救急車の音が響き度重なる余震にも恐怖を感じたという。「福島県社会福祉士会の事務局」ということで安否確認は行いたかったが、福祉の現場で働く会員の方を思うと、忙しく、混乱しているなかで電話による確認を行うべきではないと判断され、新聞で会員の名前がないか確認を行っていたとのことであった。

数日後からは全国の社会福祉士会の仲間と連絡を取り合い、物資の調達や配分を行っていた。その際、県内の社会福祉士会の方々に何が必要か電話で連絡し、すぐにそれを他県の仲間へ伝えたり、自らが近隣のお店に探しに行ったりと、なるべく翌日には必要とされている人々のもとへ物資を届けていた。また、避難所にも自ら足を運び、避難しているお年寄りの方等にも「何かお困りのことはありますか？」「何か必要なものはありますか？」と声を掛けていた。しかし東北の方特有の性格があるように、「私よりも困っている人がいるから」と援助を受けることを遠慮される方ばかりであった。このことから和田さんは自分の支援方法を見直し、物資の調達の際は自分で見たり感じたりしてニーズをつかみ、また声を掛ける際には「自分には～ができますけど」と相手への伝え方を工夫されていた。

もうひとつ、援助をするにあたり「支援者のための支援」もされていたそうだ。例えば高齢者入所施設の職員であれば、自分よりもまず利用者の方へ、と自分のことを後回しにしがちであり、バーンアウトしてしまう可能性も大いにあったと思う。しかし支援者も利用者の方と同じように被災者であり援助を受ける権利や必要性があるはずである。そのことに社会福祉士の視点を持っていたからこそ、気付くことができ、そこに目を向けて支援をすることができたのだと思う。それは支援物資に限らなかったと和田さんは言う。事務所へ直接足を運ぶ人はほとんどいなかったが、電話がたくさん入った。それは援助者からの相談で、震災以前にも関わりがあったか否かにかかわらず同じ福祉職や援助者として話をするだけでお互いに気持ちが楽になったそうだ。

様々な支援を通して和田さんは「人とのつながり」を感じたそうだ。まずはじめに「何が必要？」と声をかけてくれた他県の仲間とのつながりが大切であること。また人と人とを通じて北海道から沖縄まで日本全国から物資が調達されていたという。そして県内の仲間とのつながりとしてはやはり社会全体が混乱している中で、様々な不安を抱えつつも支援を続けなければならなかった立場として、互いの存在が互いの支えとなり、その関係は今も続いているそうだ。

そして今、和田さんが震災を経験したソーシャルワーカーの方々と「自分は～ができなかった」ではなく「自分は～ができた」と、震災当時のことを振り返ることにしている。それは約２年半が経った今だからこそ自分自身が気持ちを整理することができて、後悔の念ばかりにならないよう、互いに認め、受け止めることができるのである。それは簡単なことでも、すぐにできることでもないが、自分自身のためにも今後に活かすためにも必要なことであると教えていただいた。

お話を伺って感じたことは、震災などで混乱しているなかにも、社会福祉士の専門性は活かされているということである。和田さんを含め多くの人が感じるように「医療職」の必要性は必ずある。しかしこれも和田さんに教えていただいたことであるが、「福祉職」の必要性も実は震災直後からあるのだとわかった。その一つとして、目に見えないニーズを汲み取る力がある。さらには、共感する力や受け止める力など、社会福祉士の専門性が必要とされていることがわかった。だからこのことを私はもっと多くの人に伝えたい、と感じるとともに「自分たちは何もしていない」という高齢者の方々と同様にとても謙虚な姿勢の「支援者」の方にも実際にはかなりの活躍をされていたのだ、と伝わってほしいと感じた。

作成者	関西福祉科学大学　齊藤由季
分類	座学
プログラム名	反省会グループ討議
日時・場所	平成 25 年 8 月 24 日（土）9：00～12:00　安積総合学習センター

グループ討議では、各大学が学んだ内容の発表と個人の感想を各自発表した。

関西福祉科学大学の意見である。１つ目は、震災直後は短時間で予測し、行動するということである。これは知的障害者の成年後見人をしていた方が、銀行やＡＴＭが使えなくなるかもしれないと予測し、そのクライアントの必要となる生活費をＡＴＭが止まる前に引き出したことである。2 つ目は、地域コミュニティーやネットワークの顔の見える関係づくりの大切さである。事前にこれらのシステム作りをすることで、災害時にこれらが崩壊しても、顔見知りの関係であればその人脈や機関との繋がりを活かして、支援に繋げることができたことである。そのため、専門職は日頃から地域の繋がりや、ネットワーク、専門機関、ボランティア等の社会資源と関係を持ち、自分との繋がりを広くする必要があるということである。3 つ目は、制度につなげていく仕事である。高齢者や障害者の中には自分で意志表示ができない人がいる。その人達に対して、制度の使用について弁護士に相談することを提案し、相談するときに弁護士に対してクライアントの障害特性に対する言葉の使い方や意志を代わりに代弁する等の仲介役になることである。４つ目は、住む場所の問題である。宮城県では津波の被害が大きかった場所に住み続けると決めた時、その土地をかさ上げすることで家を建てることができる。しかし福島県では、原発の影響で故郷に帰れるかが明確になっていないため、その地に住めるようになったら帰るか、県内の原発の影響のない所に住むか、県外に移住するかを決められない人が多い。そのため、今後の生活をどうするかを考えてもらい、自己決定してもらった事に対してＳＷが尊重し、前に一歩一歩進めることができるような後押しが必要等の意見があった。

次は文京学院大学である。１つ目は使える制度を一部改正するように働きかけ、他の市から避難してきた人が制度を利用できるようにした。２つ目は、老健の職員も被災者であり、職員は利用者を支援することが仕事であるが、自分の家庭があるため家族と避難したい人はその意志を尊重するようにした。３つ目はＳＷの武器は「話す力」である。福島の人は自分の困っていることより、他人の困っていることを優先する傾向があるため、その武器や道具（例：お茶会）を使うことでニーズを引き出すことや役割を見つけ出すことができた。４つ目はボランティア団体を一本化することで、福島県の公的な団体として活動してもらうことができた。５つ目は遺体安置所

に派遣されて仕事をしている方から精神的な相談を受けたが、ＳＷとしてあるべき姿を伝えてしまい、その人の話を聞くことができなかった。６つ目は今のニーズは明日の命を左右することがあるため、ビッグパレット方式を使用し、できるだけ早くニーズを満たすことができるようにした等の意見があった。

次は淑徳大学である。１つ目は、原発の影響で避難する人のために、原発から遠い場所の避難所の確保である。2 つ目は、支援者が行動しやすい環境づくりをしたこと。3 つ目は、震災という状況下で支援者も被災者であるため相談援助ができなかった。相談援助を行うときは先を見据えた支援を行う必要があるが、震災の影響で先が見えないため、目の前のことに精一杯になっている状況である。4 つ目は、障害者、健常者、住んでいる地域によりニーズが異なる。身体障害者では、バリアフリーのある生活ができないという不満がある。精神障害者の中には、一人でいるより集団の中にいたいという思いがある。しかし健常者は自分の事だけで精一杯であるため、避難所で障害者との生活がストレスになるというニーズがあった。他にも、住む地域では福島県内でも場所により気候が違い、原発により避難した方が環境の変化に順応できず、生活ができないため、地元に戻りたいという相談を受けていた。5 つ目は、個人情報の開示問題である。特に薬を服用している人について、薬成分や分量などを教えてもらうことができない等があがった。

個人の感想の発表では、被災地視察の感想や今の被災地の現状、インタビューで学んだ事、被災した方が笑顔で自分の経験を話しておられたこと等をふまえ、今後の課題や個人の感想や考えや意気込み等を語った。

関西学院大学の池埜先生からは、「痛みは元来言葉にならないものである。それを言葉にすることは大きなストレスとなるが、それを言葉に出すということはとても素晴らしいことである。そこで涙が出たり体が震えたり言葉が出ないことは共感しているからであり、伝える言葉を考えたりすることはＳＷの第一歩である。被災者の人の大半は、元は自立していた人である。被災することにより被災者というレッテルを貼られることを望んでいるかどうかである。再生や支援をするときに、これまで生きてきた人生や誇りを尊重することが大切である。」という言葉をいただいた。

グループ討議を踏まえ、職種により、支援内容が異なること、ＳＷは話すことが武器であり、コミュニケーションをとるきっかけとなる道具を使ってニーズを引き出していくことを学んだ。そのためには、専門職としてのコミュニケーション技術やフォーマル、インフォーマルな社会資源を活用できるように知識を広げる必要があると感じた。

作成者（大学名・氏名）	淑徳大学　岡田彩香
分類	座学
プログラム名	グループ討議
日時・場所	8 月 24 日(土)　9：00～12：00　安積総合学習センター

1．2 日間のインタビューを通して感じた「ソーシャルワーカーとして出来たこと・出来なかったこと」「被災者のニーズは何か」という二つの問いについて各大学で意見をまとめて発表する。

1）淑徳大学

ソーシャルワーカーとしては何も出来なかった。しかし、生活用品や食料がある程度はあったので、それを元に何かしらの支援をすることが出来た。震災当時、ライフラインがいくつか生きていたのでメールや電話を使い情報交換をすることが出来た。また、情報を上手く使うことで、早い段階から原発から遠い地区や県外などに避難所を確保するということが出来た。他にも、支援者が動きやすいような環境を作ることも出来た。しかし、先が見えず目の前のことに取り掛かることが精一杯であり、支援者も被災者であるといった状況から、相談援助の仕事を十分に行うことが出来なかった。

被災者のニーズについては、気候の変化などにより住んでいる地域によって違っており、健常者と障がい者の間でも違いがある。また、被災者は正しい情報の開示を求めている。

2）文京学院大学

ソーシャルワーカーとして出来たことは、前からある制度を上手く使っていけるように働きかけたこと。職員も一人の人間として見るというように、一人一人を個別化して見ること。目には見えない「話す力」を武器に被災者と接し、それは被災者のニーズを理解することにも繋がったということ。原発などの影響により人権がないような状態になったことから、人としての当り前の権利を整えていくこと。また、ボランティアの団体や支援物資などが沢山来たが、混乱してしまった。そこで、団体を少しずつ一本化していった。

遺体安置所で家族の遺体を見つけることが出来た遺族は笑っていて、家族の遺体を見つけることが出来なかった遺族は泣いていた。その状況を見て「感情は逆ではないか」「自分がおかしくなりそう」と語っていた職員に対して、適切な言葉をかけてあげることが出来なかった。

被災者から、なかなかニーズを引き出すことが出来ないという難しさがある。そのため、話す技術などの「見えない道具」を上手に使って、被災者のニーズを引き出していく必要がある。

3）関西福祉科学大学

ソーシャルワーカーとして出来たことは、ATM が止まる前に利用者などの生活費を必要な分だけを予想して引き出すなど、短時間で予測しながら動いたこと。普段から地域のコミュニティやネットワーク作りをしていて、震災でシステムが崩壊しても「顔の見える関係」が整っていたので、その人脈を通して支援に繋ぐ働きかけが出来た。また、ボランティアの団体や行政とも「顔の見える関係作り」を行うことが出来た。

スクールソーシャルワーカーは教育の中には関与することが出来ないので、何かあれば先生方にお願いをすることしか出来ず、自分で支援することが出来なかった。

震災によって、支援物資を貰うのが当たり前だと思っている子どもが増えているため、ソーシャルワーカーが当たり前ではないということを教えていく必要がある。また、障がい者や高齢者は意志表示が曖昧なので、制度の利用を説明する時は弁護士と本人との仲介役をソーシャルワーカーが担い、分かりやすく伝えるということも必要である。このように、制度を利用した継続的な支援をしていくことが大切である。

２．この５日間のプロジェクトを通して、感じたことや考えたことを一人ずつ話す。メモはとらず、心でみんなの思いを聴き、受け止めること。

３．池埜先生のお話

痛みは元来、言葉にはならないものである。よって、痛みを言葉で表現することは、とても難しいことである。今回のこのプロジェクトで感じた感情や共感したことを、これから言葉でどうやって伝えていけばいいのかを、自分自身で見つけていくことが大切である。それと同時に、自分をケアしていくことも必要である。被災地と地元の違いにギャップを感じて戸惑ったら、それを自分の中で処理しようとせずに誰かに話をすること。それでも何か思うことがあったら、ノートにその思いを書いていくこと。それが「気付き」を伸ばすことにも繋がっていく。

今回のプロジェクトでインタビューしたソーシャルワーカーは、支援者であると同時に被災者である。そのことを踏まえて、今回のインタビューを振り返った時に、「被災者として語っているのか」「ソーシャルワーカーとして語っているのか」に注目しながら、その方はどう折り合いをつけているのか。また、被災しているからこそ見つけた、その方にとってのソーシャルワーカーのあり方や価値などを読み取っていくこと。自己決定をすることが出来ない人のために、「現在」をどのようにして生きていくかということについて支援していく、新しいソーシャルワーカーのあり方を見つけていくことが重要となっている。

作成者（大学名・氏名）	文京学院大学　木村恵理
分類	座学
プログラム名	グループ討議
日時・場所	平成 25 年 8 月 24 日（土）9：00～12：00　安積総合学習センター
講師・インタビュー対象者	関西福祉科学大学　池埜先生

5 日間に及ぶ第 4 次派遣のソーシャルワーカーの声プロジェクトのまとめの場として、最終日にグループ討議が行われた。インタビューを通してわかったことや、震災時にソーシャルワーカーとしてできたこと、できなかったことなどを、各大学が話し合い発表した。

私たちは、ソーシャルワーカーとしてできたこととして、インタビューなどから次のことを考えた。まず、ソーシャルワーカーは医者や看護師などのように目に見える道具を持っていない。そのため、目に見えない道具を使っていく。その道具の一つに「言葉」がある。福島の地域特性から避難されている被災者の中でも支援者が何か支援しようとしても、自分よりももっと大変な人がいるからと言い、遠慮する人がいることがわかった。そのため、直接「なにか必要なものはあるか」などのことを聞くのではなく、その方の表情などをみて感じとっていく、また、話す内容が直接ニーズと結びついていなくても、このような話をされる背景には何かあるのではないかと読みとることもソーシャルワーカーだからできたことなのではないかと感じた。また、インタビュー中に、社会福祉協議会の事務長の和田さんが話していたエピソードの中で、ビックパレットに避難されている被災者を支援する中で「なにか、困っていることはありますか」などのアプローチをするのではなく、身近な物を使い、「よかったらお茶を飲んでいきませんか」などと話しかけて、その方と関わりその方の話を聞いていくというアプローチをしていたということを聞いた。その中で、その方が以前喫茶店を営んでいたということを知り、避難所内のお茶飲み場のなかでお茶を提供するという役割をしていただいたということを知った。ソーシャルワーカーは、こちらがなにか支援するばかりではなく、その方がその方らしく生活できる場所を提供し、その方の力を引き出すということも大切だということを学んだ。

また、逆に震災時は、環境が整わず活用できる制度もなかったため、ソーシャルワーカーだからこそという点では何もできなかったということを話されていた。この時、最低限の生活もできない状況ではまず人として考え、明日に命をつなぐためにどうするかを考えることが大切であるということを学んだ。

そして、今をどう生きるかということが大切な状況のなかでニーズとしては、すぐに使える制度などを整えることが大切だということがわかった。例えば、ビッグパレット方式のような申請してその日のうちに使うことができる制度など、震災時においてこれまで使っていたものが使えなくなった場合、その状況に合わせて創っていくことも大切であることを学んだ。

また、このグループ討議の中では関西福祉科学大学と淑徳大学の発表からも様々なことを学んだ。

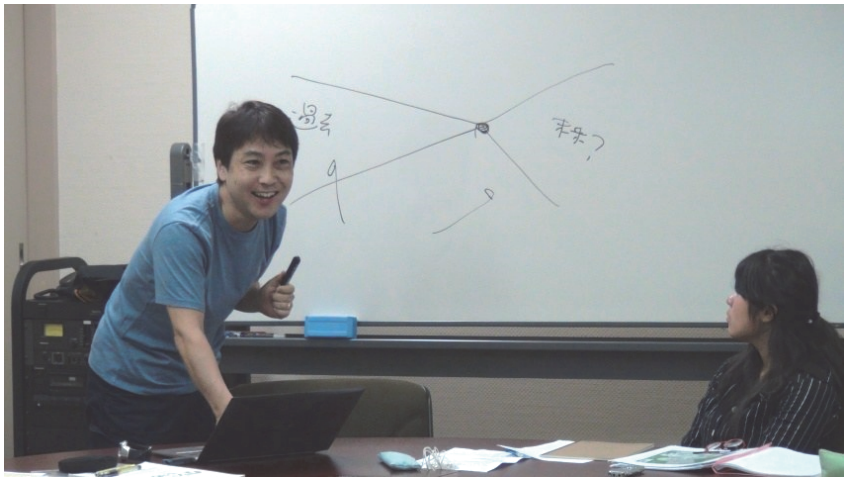
まず、関西福祉科学大学の話の中で、地域コミュニティを作り日頃から関係を築くことが大切で

ある事を学んだ。また、その時の状況をみて今後を短時間で予測することも大切であり、例えば震災により ATM が使えなくなってしまうかもしれず、しかし今後お金が必要になるのではないかと考えて短時間でお金を引き出すことも大切であるということも知った。

そして、淑徳大学の話では、住んでいる地域によってニーズが違うということがわかった。福島は会津、中通り、浜通りと三つの地域があり、それぞれで地域特性が異なり、その地域ごとにニーズはどのようなものがあるのかなどを考えていかなくてはならないことがわかった。

最後に池埜先生から総評としてお話を伺った。

福島という被災地を考えたとき、今後を支えるのではなく、今という生活を支えていかなくてはならないということがわかった。また、今回福島を訪問して自分自身が感じたこともあるが、そのなかで福島の人が今も大変な中にいるから自分も福島から戻った時に規則正しく生活しようと思うのではなく、自分のできるところから行っていくことも大切であるということを教えていただいた。



■（関西福祉科学大学　４年　植田美悠）

他県と異なる被害の福島県の現状に様々な思いが巡りました。見通しが見えない被災者の未来に寄り添うソーシャルワーカーの姿をもっと多くの人に知ってもらいたいと改めて思いました。

■（関西福祉科学大学　２年　斉藤由季）

このプロジェクトで、「人として何ができるのか」という言葉がありましたが、それが「ＳＷとして何ができるのか」へと、一歩前進してつなげていきたいと思います。今回の体験で自分も被災したにもかかわらず、被災者の支援を行う人の底力、ＳＷとしてのプライドや誇りを感じました。

今後も勉学に励み、ＳＷとしての専門性を高めていこうと思います。

■（関西福祉科学大学　２年　福井弥生）

私は、被災地では一体何が現在必要とされているのか？という疑問をもち参加しました。また、このプロジェクトに参加してから被災地へ向ける視線が変わりました。これからもっと専門性などを勉強していき、被災地やそれ以外で私たちができる事は何のかを考えて行きたいと思っています。

■（関西福祉科学大学　２年　中上裕菜）

今回初めて声プロジェクトに参加させていただき、テレビなどを通してでは知ることのできない被災地の現状を知ることが出来ました。震災時、ソーシャルワーカーがどのような活動を行っていたのかを直接インタビューさせていただき、大変よい経験をさせていただくことが出来ました。これからこの活動を通して自分自身も成長できればと思います。

■（淑徳大学　２年　岡田彩香）

声プロジェクトを通して、初めて被災地を訪れました。だいぶ復興が進んでいるといっても見えない傷が沢山あるように感じました。そんな中、現地の人々の「頑張ろう」という気持ちが伝わってきて、私たちにはどんな支援が出来るのだろうと考えることが大切なんだと思いました。

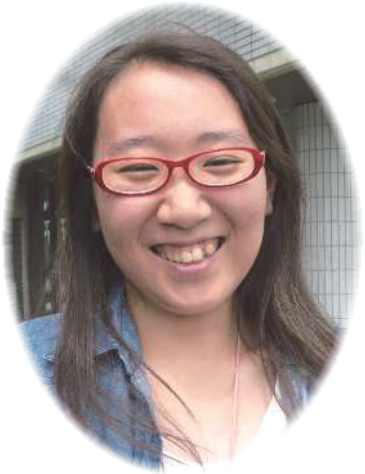
■（淑徳大学　２年　友利仁美）

初めて声プロジェクトに参加して戸惑った部分もあるが、支援者であり被災者でもあるSWさんの思いや、今なお復興に向けて歩み続けている人達の思いを少しでも感じることが出来たかなと思います。今回のことを通して自分にできることを探していきたいと思いました。また社会福祉士資格が取れるよう努力していこうと思います。

■（淑徳大学　２年　新保江吏万）

今回のプロジェクトで支援者も同時に被災者であり、ワーカーもジレンマを抱えながら支援をしているということを知りました。そして、もっとソーシャルワーカーの存在を知ってほしいと感じました。これからは福祉に携わる者として深く学び、多くの人へこのソーシャルワーカーの声を伝えていきたいと思います。

■（淑徳大学　２年　森菜摘）



今回のプロジェクトを通して繋がり、ネットワークの大切さなどを改めて知ることができました。また、被災者の方と直接お話したことによって被災者の本音を聴くことができました。被災から２年経ったなか、これから私たちはどのように寄り添い、支援していくのかが課題になっているのかと思いました。

■（文京学院大学　4年 小野 綾子）

被災地に足を運ぶのは今回が３度目であった。そのたびに思うのは「遅すぎることはない」ということ。「もう１年経ったから」「もうすぐ３年経つから」と初めは思っていたが復興はまだまだ不十分で、特に福島の場合はまだ“始まっていない”ことも分かった。震災のことが風化してしまわないよう伝え、知り、自分にできることを探していきたいと感じた。

■（文京学院大学　4年　木村 恵理）

自分たちが普段生活している中では、震災の記憶が段々と風化しているように感じられる。しかし、被災地、福島では未だ原発という被害から震災の記憶というものは色濃く残っている。そのような状況を今回見た私たちには出来ることは限られるが、震災の記憶を風化させないために、周りに伝えていかなくてはならないと感じた。

プロジェクトを通じた学生の学び

関西福祉科学大学
斉藤千鶴

今夏の日本列島を襲った猛暑が続く、夏真っ盛りの 8 月 20 日、本プロジェクトの任務を背負った大阪チームは、東北へ飛ぶことで、少しでも暑さが和らいでいてくれたら、という淡い期待を胸に福島に向かった。

しかし、若い学生たちは、暑さなんかおかまいなしで、未知の経験を前に、元気で意欲的な姿に私の目には映った。出発前の事前学習では、兵庫県神戸市のソーシャルワーカーへのインタビュー時から、学生の成長ぶりは早くもうかがえた。それに先立つ、大学で行ったインタビューのロールプレイ学習では、4 年生の先輩を前に、ややつまづきながらのインタビュー学習であった。しかし、その失敗を糧に、神戸のソーシャルワーカーへの事前学習では、質問も途切れず、なかなか良い感触でインタビューの予行演習を終えることができた。

いよいよ福島に足を踏み入れると、事前の短期学習で十分に準備ができただろうか、というこちらの心配をよそに、各学生は機敏に動いていた。到着日の午後のオリエンテーションに始まり、夜には現地の社会福祉士会の方の話を聞き終えると、いよいよ明日の被災地視察を前に、各自が本プロジェクトの始動に、さまざまな思いで気持ちの高ぶりを感じていたはずである。

翌日の「激甚被災地訪問」では、震災から 2 年 5 ヶ月の月日が経っているにもかかわらず、瓦礫の撤去が終わらず、今なお復興が手つかずのまち、津波で何もかも流され、生々しさの残る荒地、これらを目にした学生たちは、一様に震災の大きさと自然の驚異に言葉を失っていたようだ。

原発事故で立ち入り禁止区域近くの富岡町を視察したときは、震災直後の時間が止まったままの惨状に、恐らく頭では理解しようとしているのだけれど、身体では十分にこの事態を受け止めるのが難しかったはずである。

「こんなことが起きていいはずがない！」と身体が反発するような激甚被災地視察の体験は、翌日から行った本プロジェクトのメインプログラムである、ソーシャルワーカーへのインタビュー時に、被災地の方々が受けた被害を少しでも共感しながら質問することができる助けになったと思われる。

インタビューそのものは練習の成果もあって順調に運んだが、ソーシャルワーカーの口から語られる言葉は、一つひとつが重いものであった。はっきりとした口調で被災後の行動を語られる一方、思うように支援ができなかったという苦悩の中から絞り出すように答えておられる場面もあった。

2 日にわたる 2 人のソーシャルワーカーの方々へのインタビューから、学生は何を学び取ったであろうか。災害時にソーシャルワーカーは何ができるのか、という問いを抱えて

福島に来たが、インタビューからは、ワーカーとしての働きが「語り」の随所に表現されていたのではないだろうか。

そのことは、プロジェクトの最終日、意見交換やグループ討議の場面で、学生がうまくまとめて報告をしていた。実際のインタビュー時には、「災害時のソーシャルワーカーの役割は、何であると思われますか？」と問う学生に対して、ワーカーの方は「被災直後は、ワーカーとしては何もできなかった」、と苦悩した様子で胸中を語っておられた。しかし、その後のさまざまな場面での動きを語られるにつけ、支援活動のベースに、ソーシャルワーカーとしての専門性に裏打ちされた視点や判断が随所にあったのではないかということが強く印象づけられた。

また、一方では、プロジェクトに参加した学生が皆、順調に活動を終えることができたわけではない。事前に活動の趣旨に賛同してプロジェクトに参加した学生だが、活動の全容には到底想像が及ばないまま、プログラムに身を預けたわけである。参加してみると、激甚被災地視察を通して、現地の惨状は想像以上のものだった。また、インタビューを通して、被災者やソーシャルワーカーの方々が置かれている厳しい状況と苦悩に触れ、心を揺さぶられた学生も多いはずである。

20 年前後の人生経験しかもたない学生にとっては、被災地の人々が受けたあまりにも不条理な事態を、充分に受けとめることができなかったはずである。しかし、学生たちはこうした状況の中で、必死にソーシャルワーカーの一言ひとことを聞きもらさずひろうことに努めた。プロジェクト最終日のグループ討議の中では、学生が体当たりで受けとめてきた様子がひしひしと伝わってきた。

福島から帰阪すると、早速学生は、プロジェクトの報告書作成にとりかかった。まだ被災地訪問から日が浅い今は、とにかくプロジェクトで得たものを記録として残すことに精一杯である。しかし、４泊５日の激甚被災地訪問の旅は、各学生が全身で体験できた「学び」そのものであることは間違いない。

普段の学生が置かれた環境を考えると、学校では座学中心にならざるを得ない。しかし、こうしたプロジェクトは、「学び」に必要な要素を丸ごと提供してくれる。本プロジェクトによる「学び」の体験は、「学ぶ」おもしろさと楽しさを教えてくれる。

しかし、本プロジェクトの一番の収穫は、何といっても「かっこいいやん！ソーシャルワーカーって！」、「私もなりたいわ！あんなソーシャルワーカーに！」という、学生の口からこぼれる一言ひとことであったのではないだろうか。

福島県の現状と課題

淑徳大学
山口光治

はじめに

第 4 次派遣は、8 月 20 日(火)から 24 日(土)の間、福島県郡山市を拠点にソーシャルワーカーの声プロジェクトのフィールドワークを実施した。本プロジェクトは、これまでに宮城県と岩手県にて実施してきたが、福島県において取り組むのは初めてとなる。この 5 日間のなかでは、一般社団法人福島県社会福祉士会長の島野光正氏の講演、地域で実践している 2 名のソーシャルワーカーへのインタビュー調査、被災地を訪問し住民の方々からお話を伺うことなどを実施した。このように限られた期間に得られた情報ではあるが、それをもとに福島県における発災後の現状と課題について述べてみたい。

東北 3 県の被災状況の違い

被災した東北 3 県(岩手県、宮城県、福島県)では、地震による被害とその地震によって発生した津波による被害(主として沿岸部)が共通し、特に、人的被害や建物被害は圧倒的に宮城県で多く発生している。参考：平成 25 年 8 月 9 日付警察庁緊急災害警備本部発表の広報資料によると、宮城県：死者 9,537 人・行方不明者 1,299 人・全壊 82,889 戸・半壊 155,099 戸、岩手県：死者 4,673 人・行方不明者 1,145 人・全壊 18,370 戸・半壊 6,558 戸、福島県：死者 1,606 人・行方不明者 208 人・全壊 21,190 戸・半壊 73,022 戸となっている。

しかし、福島県においては、それに加えて東京電力福島第一原子力発電所(以下、「福島第一原発」という)の放射能漏れ事故が発生したために、平成 25 年 8 月 12 日現在の避難者数は 91,998 人となり、宮城県の 97,715 人に次いで多くなっている（平成 25 年 8 月 22 日付復興庁資料より)。また、その内、居住していた県以外に避難している人は、福島県 52,277 人、宮城県 7,538 人、岩手県 1,540 人となり、圧倒的に福島県民による県外避難が多いことも、原発事故の深刻な影響といえる。

発災後の福島県内の避難の状況

2011 年 3 月 11 日の地震発生後、沿岸部への津波の被害、そして原発事故の被害により、福島県内の避難状況は、主に次のような傾向であったことをインタビュー調査より把握することができた。

福島県は南から北へつらなる阿武隈高地と奥羽山脈によって、福島市や郡山市など中部の「中通り」、西部の「会津」、太平洋沿岸の「浜通り」の 3 つの地方に分けられ、気候や文化が異なるといわれている。福島第一原発は、浜通りの中央付近、双葉郡大熊町・双葉町に立地している。原発事故後、大きく避難の流れが二つの傾向にあったという。一つは福島第一原発より北側や北西側に居住する人々が、郡山市や二本松市、福島市などの中通りへ避難している。そして、さらに会津や県外に二次避難した方もいる。もう一つは原発の南側に居住する人々が、それまで暮らしていた地域と同様の、太平洋に面した浜通りのいわき市などへ避難している。そのいわき市も発災当初はライフラインが停止していた。

原発周辺地域から避難した人々は、まず、一次避難所へ移動し、その後、応急仮設住宅、借り上げ住宅などへ移り生活している。また、県内避難から、さらに県外へ避難している住民も多い。特に、放射能の影響を心配し、小さな子どもを抱える家族などの県外避難が多い傾向にあるという。このような避難により、発災前と発災後の家族の形が変わってきていることも指摘されている。

避難先での生活

福島第一原発の影響により避難した人々は、いつ終息するかも見通しを持てないまま、避難先の自治体での生活を送っている。双葉町は、避難町民の集団移住先をいわき市や郡山市、南相馬市などに整備する町外拠点（仮の町）構想を復興計画に盛り込み、町民の生活再建、町の再興の見通しを立てている。移住先であるいわき市の人口は約 33 万人であるが、原発地域から避難してきた方が 2 万 4 千人程度いるという。

この「仮の町構想」とは、双葉町に限らず、福島第一原発周辺の放射線量が高く、その土地で生活できない住民に、また元に戻れるまで他の市町村へ集団移転してもらう構想であり、もともと住んでいた自治体の行政サービスも共に移転させるものである。国は 2012 年から、放射線量によって避難指示区域を「避難指示解除準備区域」「居住制限区域」「帰還困難区域」の３つに分けているが、「帰還困難区域」にあたる自治体を中心に仮の町構想が計画されている。この構想にある、移住する前の自治体が移住後も行政サービスを提供することは、移住先の自治体との役割分担や調整を必要とする。例えば、住民税などの納税はどちらの自治体にするのか、保健サービスや福祉サービス、あるいは教育行政はどうなるのかなど調整が必要となる。さらに、移住してきた人々とその移住地の住民との間での、日常生活を送るうえでの摩擦も生じているという。避難してきた人々が、将来的なことを考えて、どこを居住地としていくのか、コミュニティをどう創造していくか、課題は大きいといえる。

障がい者福祉領域の支援

今回のインタビュー調査でお聞きした障がい領域のソーシャルワーカーの話から、障がい者福祉のあり方が、浜通りと中通りでは異なることを伺った。詳細な比較検討を行ったものではないが、浜通りの原発周辺地域は東京電力の補助金により、障がい者福祉はサービスがパッケージ化された施設が多く、しかも立派な施設が多いという。そのような施設福祉サービスを中心に利用していた障がい者の方々が中通りに避難してきて、今まで受けたことのないサービス、つまり、関係機関・団体とのネットワークを作り避難所や在宅で必要なサービスを調整していくケアマネジメントによる支援を受けることになったという。中通りはケアマネジメントによる障がい者支援が充実しているので、それを利用しながら暮らしていこうと考えている避難者も多いという。しかし、それらによって支援を充実させていっても、利用者はこれまで生活してきた土地への望郷の念を持ち続けているので、そのことを忘れずに支援していくことが大切であるとのことであった。故郷があるのに故郷を離れざるを得ない人々の想いを汲み取り、寄り添う支援が、今、求められている。

災害時のソーシャルワークの役割

文京学院大学
鳥羽美香

今回「ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト　in　福島」に参加させて頂いた。今回はプロジェクト全体では第４派遣であるが、私自身は昨年の第２派遣の宮城県に続き２回目の参加となった。

東日本大震災から２年半が経っているが今回の福島では、津波被害に加え原発事故により、まだ先の見えない生活を強いられている現地の被災者の方々の様子を少しでも知ることが出来、貴重な経験であった。

今回文京学院大学がインタビューさせて頂いたのは、楢葉ときわ苑の施設長渡辺幸雄氏と、福島県社会福祉士会事務局和田由紀子氏であった。

インタビューに同席させて頂いた中で印象に残ったエピソードを紹介しながら、災害時におけるソーシャルワークの役割について若干の考察を試みたい。

楢葉ときわ苑では、2011 年 3 月 12 日に双葉郡楢葉町から避難指示が出て、88 名のお年寄りと 37 名の職員がいわき市内の小学校へ避難した時から、床に段ボールと毛布を敷き、足の踏み場もない状況の中でお年寄りの世話をしていたという。職員も被災者・被害者であり、また、家族の安否もわからない状況の中、お年寄りのお世話をしていた。支給される食糧も限られた極限状態の中、「何もない中で、専門職といっても力を発揮出来ない」と渡辺施設長は感じたという。

介護職、ソーシャルワーカー、看護職、そういった職種を超えて助け合いながらお年寄りを守っていったという。渡辺施設長は、極限状態の中では、専門職の力というよりは人間力、応用力というものが試された、と語られた。避難所生活をしながら常に先々のことを考え、次の行動に移していった。２次避難先の確保、交渉。その時には、お年寄りは 77 名、職員に関しては一緒に行く職員を募り、他の職員は自宅待機をしてもらったという。その後いわき市内の他の老健施設に間借りをして一部事業再開。常に利用者の利益優先、アドボカシーを心掛け、「声なき声を代弁」していったと振り返られた。

社会福祉施設等災害復旧費補助金の対象となり、2013 年 3 月に仮設老健としていわき市内に楢葉ときわ苑を再開することが出来た。

渡辺施設長がおっしゃっていたのは、「ただ黙って行政の施策を待っていて復興できるのだろうか？」「一人一人が社会資源となりソーシャルアクションを展開していくことが地域の復興につながる」という言葉であり、これはまさにソーシャルワークであると思う。

いわき市内の施設はあくまで「仮設」であり、双葉郡に戻りたいというお年寄りの希望の灯を消してはならない、また双葉郡の住民のストレングスを信じてそれを支援すると語られた。利用者の個別化、アドボカシー、ソーシャルアクション、ストレングス等、これらはソーシャルワーク実践の真髄であり、災害時に限定されるものではないが、極限状態

で実践されたことに大きな意味があると思う。

もう一人のインタビューは、福島県社会福祉士会の事務局の和田さんであった。

和田さんは、事務局として、施設や事業所で物資不足の中、必要なものを必要な場所へ届ける調整を中心に活動されていた。

また、県の社会福祉士会と介護支援専門員協会の会長が中心となって県内の職能団体が集まり、福島県相談支援専門職チームを 4 月の初旬に立ち上げ、4 月半ばには県の委託が決まって、全県内に活動が広がっていった。

和田さんをはじめ支援者が避難所や事業所を回って情報を集めそれを支援に活かす。ネットワークが作られていった。福島県社会福祉士会はそのコーディネート役であった。

和田さんは「それぞれバラバラに動いていると、ひとりの人に『何か手伝うことがありますか？』と 1 日に 8 回も同じ質問を別々の支援者がすることになる。それでは利用者支援にはならない」と語る。和田さんの活動は「一言でいえば交通整理をしていた」と振り返られた。これは施設ではない「事務局」だから出来たことである、と語られた。

また、日頃から培った専門職を始めとする人間関係が役にたったという。ビッグパレットふくしまにも和田さんの案内で行くことが出来た。ここは福島県内最大の避難所だった場所で、一時期は 2500 名が避難していたという。そこで相談支援チームはまず避難所のどこでどのようなニーズが発生しているのかを把握し、ニーズを支援につなげる活動を行ったという。多くの人がいまだ仮設住宅に住み、その先が見えない状況の中で、「震災は終わっていない」という思いが強いという。

ソーシャルワーカーは、医師や看護師のように「目にみえやすい」支援方法を持たない為、その重要性が一般に周知し難いという側面もある。今回お二人の貴重な実践をお聞きし、改めて災害・緊急時におけるソーシャルワークの重要性が理解出来たと思う。

アドボカシーやソーシャルアクション、ネットワーク等、日ごろの実践の積み重ねが災害時に活かされたということを改めて知ることが出来た。

特にソーシャルアクションやネットワーク等は、緊急時に実践しようと思ってもその基盤形成がなされていないと難しいと思われる。和田さんがおっしゃっていたように日頃の実践、積み重ねた人間関係がものをいうのである。また、福島県社会福祉士会がコーディネート役となって、調整が出来たことも大きな成果であったと思われる。

さらに、渡辺施設長が老健施設再建を成し遂げたように、その推進力は、諦めずに信念を持ち続け、それを実践に移す実践者の強い思いであったこと思われる。

災害時にソーシャルワーカーがこれだけの活躍をしたという事実は学生にとっても、また私自身にとっても非常に感銘深いものであった。

この貴重なソーシャルワーカーの声を語り継いで次世代に伝えていくことがこの場に立ち会えた我々の使命（ミッション）なのだと思う。

あとがき

やっと、福島県に行くことができました。

これまで、学生・教員のチームを宮城県・岩手県に派遣し、東日本大震災による被害の凄まじさを目の当たりにし、そこで支援活動を行うソーシャルワーカーの活躍と苦悩を知り、学生だけではなく、教員にとっても大きな学びとなりました。阪神淡路大震災当時、神戸市職員として災害支援の実際を一定体験した私にとっても、津波被害と地震被害の違いは想像以上でした。

ましてや我が国ではかつて例をみない原子力発電所による放射能汚染事故は、私たちが想像することさえ許されない状況にあった（ある）のではないでしょうか。「福島には宮城・岩手とは全く違う福祉ニーズがある」、「福島の震災は過去の話ではなく、現在進行形である」といったことは抽象的には理解できても、その中で社会福祉専門職に何ができるかを具体的にイメージすることはできませんでした。

本プロジェクト関係者は、「福島抜きに今回の震災を語ることはできない」との思いを共通して持っていましたが、「現在進行形」の被災地に私たちが入り、ワーカーの方々にお手を煩わすことに躊躇いがありました。

それでも、時間が止まっているかのような原発周辺地域を歩き、これはソーシャルワーカーの“卵たち”に見せ、「私たちに何ができるのか」を考えさせなければならないと感じました。その想いを福島県社会福祉士会にお伝えしたところ、本プロジェクトへの協力を快くお引き受けいただき、強風吹き荒れる冬の郡山も暖かく感じたことを思い出します。

実際のフィールドワークでは、6名のソーシャルワーカーの方々が真摯に、そして力強くお話いただき、学生たちは大きな刺激を受け帰ってきました。最終日には、涙ながらに「ソーシャルワーカーの”想い”を伝えていきたい」と語る学生の姿を見るにつけ、学生の言葉を借りれば「衝撃的で生涯忘れられない数日間」であったことでしょう。

今回で4回目になる本プロジェクトを振り返ると、「過酷な状況で展開された実践」が持つ力をまざまざと見せつけられたということです。そこで積み重ねられた実践は、「臨床の知」として、やがて日本のどこかで起きるであろう大規模災害において生かされなければならないと思います。その「臨床の知」は、これから福祉現場で専門職としてのキャリアを積み重ねていく“卵たち”に伝えていかなければなりません。災害支援において、ソーシャルワーカーは中核的な役割を発生直後から担っていることを多くの人々に知っていただく必要もあります。

私たちはそのミッションを果たすため、小さい歩みながらも少しずつ前に進みたいと考えています。

本プロジェクトにご協力いただいた福島県社会福祉士会の皆様方、インタビューに応じていただいたワーカーの皆様に、改めて深い感謝を申しあげあとがきとさせていただきます。

福祉系大学経営者協議会復興支援委員長（関西福祉科学大学）　遠藤　洋二

第 4 次派遣　メンバー

大学名	学年	氏名	備考
関西福祉科学大学	教員	遠藤　洋二	復興支援委員長
	教員	松宮　満	
	教員	斉藤　千鶴	
	4 年	植田　美悠	
	2 年	齊藤　由季	
	2 年	中上　裕菜	
	2 年	福井　弥生	
淑徳大学	教員	山口　光治	
	職員	金澤　好隆	
	2 年	友利　仁美	
	2 年	岡田　彩香	
	2 年	新保　江吏万	
	2 年	森　　菜摘	
文京学院大学	教員	鳥羽　美香	
	教員	茂井　万里絵	
	教員	中島　修	
	職員	加藤　弘美	
	4 年	木村　恵理	
	4 年	小野　綾子	

福祉系大学経営者協議会
ソーシャルワーカーの“声”プロジェクト
第４次派遣

平成２６年３月
編集　文京学院大学
〒356－8533　埼玉県ふじみ野市亀久保 1196
ＴＥＬ　049-261-6488
ＦＡＸ　049-261-0089